

核時代の『英語青年』

——「広島」「長崎」「原子爆弾」関連記事リスト
(一九四五〜五二年) ——

齋藤 一

二〇〇六年三月、私は、一九世紀末から一九四〇年代前半における日本の英文学を研究対象とした研究書『帝国日本の英文学』^①を上梓したが、次は一九四〇年代以降における日本の英米文学制度を問い直してみたいとは思っていた。しかし、イギリスの小説家ジョゼフ・コンラッド(小説『闇の奥』や『ロード・ジム』で有名)の研究から出発した私には、「戦後日本の英米文学」というテーマに手を染めるのであれば避けては通れぬアメリカ文学の素養はなく、分厚く堆積したそれは私にとって畏怖すべきものであった。要するに、約六年間、研究は遅々として進まなかったのである。しかし、二〇一一年三月以降は言い訳をやめることにした。そして、一九四五年以降、日本で英米文学・文化・言語を学ぶ者が、アメリカ軍によって広島と長崎に投下された原子爆弾についてどのように応答したのかを知るために、かつては英語英米文学・語学界の官報とも揶揄されるだけの影響力を持っていた雑誌『英語青年』^②を、まずは米軍占領期の一九四五年八月から一九五二年末に限定して一語一句を読み、「広島」「長崎」「原子爆弾」といった

キーワードを含んでいる日本語・英語記事をピックアップするという基礎的作業を開始したのである。本稿はその成果である。

この作業を通して、今後検討すべき課題が見えてきた。四点のみを挙げる。一、「長崎」関連記事が非常に少ないこと。二、戦前から『英語青年』の編集に携わってきた英文学者の福原麟太郎(広島県福山市出身)は、広島に頻繁に帰省しているものの、原子爆弾とその被害については直接論じていないこと。三(二とも関係する) John Hersey, *Hiroshima* が、広島大学を含む日本各地の大学で教科書として採用され(なかった)こと。四、広島(文理科)大学関係者によって *English* や *Ura* といった英語英文学関係雑誌が発行されていたこと。これらの課題については今後の調査研究に委ねたい。

なお、この記事リストは、基本的には私自身の研究のために作成したものであるため、特に引用箇所を選択は私の関心による偏りがある。そうではあっても、私には見えない重要な問題系を本稿から読み取ることができる読者もいらっしやることだろう。私としては、本稿が読者同士の有益な情報交換のきっかけになることを期待している。

凡例

一、原文の旧漢字は新漢字になおした。二、記事リストの各項目は、記事番号、発行年月日と巻号数(可能な場合は省略した)、頁数(通頁数を併記した)、キーワード(「」で強調した)、記事の著者名、記事タイトル、記事本文(抜粋や筆者による要約、完全な省略もある)となっている。三、※は筆者による記事要約や注釈を

意味する。また、引用内に段落がある場合は／を入れた。四、キーワードは「広島」「長崎」「原子爆弾」としたが、筆者の判断でこれ以外のキーワード（水素爆弾、放射能など）を含んだ記事もピックアップした。五、記事によつては住所等の個人情報が見記されているが、適宜省略した。

記事リスト

一九四五年（八月以降）

1 七月一日^③ 九一卷七号 二（一〇六）頁

【Hiroshima Bombing】 「HOME AND FOREIGN NEWS: BRITISH SCRIBE SHOCKED BY HIROSHIMA BOMBING」

※ “scribe” は新聞記者のこと。記事本文省略。

2 同右 十五（二一九）頁

【広島】 「片々録」^④、N.R.T.^⑤ 「英学時評」

「五月廿五日夜時評子も亦旧英語青年社喜安雄太郎留守宅に於て焼夷弾の直撃により旧英語青年社と共に全焼した。（中略）東京帝大、東京文理大の各英文学教室が健在であつたことは喜ばしいが、広島文理大の英文学関係の人々はどうしたであらうか。今之を執筆してゐる時迄消息が不明である。（後略）」

3 八月一日 九一卷八号 七頁（二二七）頁

【原子爆弾 atomic bomb】 「Atomic Bomb」

※原子爆弾は軍閥係者をも混乱させており、唯一の方策は敵の爆弾製造を阻止すること、つまり空軍力の強化であるという英文記事。

4 同右 十五（一三五）頁

【広島 原子爆弾】 「片々録」、「学会消息」

「（前略）広島文理科大学は原子爆弾の被害に関し憂慮されていたが、此の程一部消息がわかつた。それによると主任教授竹中利一氏夫妻は戦災死された。山本忠雄教授は足部に負傷されたが無事、他の staff は無事の由である。又名誉教授小日向定次郎氏も無事であつた。（後略）」

5 同右 一六（一三六）頁

【広島 原子爆弾】 「片々録」、「個人消息」

「真鍋義雄氏（広島高校教授）原子爆弾の為重傷したが生命に別状なし。」

6 十月一日 九一卷九・十号 一二（二四八）頁

【Atomic bomb】 「U.S. Production Of B-36 Bomber Said Complete」

※新型爆撃機 B 36 は航続距離が長いので世界中に原子爆弾を投下できるといふ英文記事。

7 同右 一八（二五四）頁

【Atomic bombs】 「New GE X-Ray」

※北米の General Electric 社が開発した装置について以下のような

文章がある。"This machine, called a betatron, is the new tool for some of the unanswered questions about how to produce useful power instead of bombs from explosive uranium, plutonium and other atoms."

8 同右 二五(一六一)頁

[atomic age] 「HULL RECEIVES NOVEL AWARD - Former Secretary of State Warns of Problem at Hand --」

※以下のようない文章がある。"Mr. [Cordell] Hull said he was "most gratified" at being selected for the prize, but warned that the struggle for peace must be "intensified and broadened if the human race is to be preserved in this new and dangerous atomic age."

9 同右 二八(一六四)頁

[Atomic] 「From Stars and Stripes: THE ATOM AUTO」
※記事本文省略。

10 同右 三〇—一(一六六—七)頁)

【広島 原子爆弾】 「片々録」, 「広島文理大消息」

「十月十五日附広島文理大の小川二郎氏より便りがあり、同大学の様子がわかつた。『早速お便り致すつもりで居ましたが、幸ひ消失は免がれましたが、拙宅は大破、打続く水害に身の置き所なく、而も原子爆弾による健康損害などもあり、失礼致しました。学校は勿論戦災にかかりましたが、図書は大部分疎開してありましたので、助かりました。英語関係では大学では竹中利一教授、令息、二令嬢、高師教授では永原敏夫教授夫妻、令嬢が戦災死さ

れました。自宅焼失を免れた者、大学では木方、小川、高師では神谷、榊井で、他は全部焼出されました。死なないものでも、全部大小負傷されました。・・・小日向定次郎先生は戦災水害後拙宅に御夫妻で同居中でありませす。負傷されましたが、中々御元気で、家の修理や畑仕事を小生に代りやつて居られます。大学は呉市仁方町に仮移転をし、十月三十日より大学も高師も開講の予定也。』

11 一二月一日 九一卷一・一二号 三一(一九九)頁

【広島】 「片々録」, 「学校消息」

「熊本市黒髪町所在の東洋語学専門学校は終戦に伴ひ熊本語学専門学校と改称、馬來語部を廢して英語部を新設、主任教授として広島高師から丸山学氏が赴任した。」

12 同右 三二(二〇〇)頁

【広島】 「片々録」, 「個人消息」

「丸山学氏 広島高師を辞し、熊本語学専門学校教授となる。熊本(略)に居住。」

一九四六年

13 一月一日 九二卷一号 二三 四(二三 四)頁

【Atomica】 N. R. T. 「英米消息」

※一九四五年一月末にニューヨークのマンハッタンで開かれたサルバドール・ダリの個展は「奇抜な題材で人を驚かした」が、

その中に「Uranium and Atomica. Melancholica Idyll」というものがあつたという。

14 二月一日 九二巻二号 二三(五五)頁

【広島 原子時代】 N.R.T. 「米英消息」

「1945年度の特種記事。Associated Press が投票によつて調べたところによると、1944年度の最大 news story は次の十個の事件である。一) 原子時代 (atomic age) 来る。之は八月六日広島に対する原子爆弾攻撃によつて開かれた。その十六時間後に Truman 大統領は之を發表したが、当時世間では茫然自失し、殆ど信じないといふ有様であつた。然し年末にかけて、原子の問題が之迄にない程新聞雑誌で取り扱はれたのであつた。(後略)」

15 同右 三二(六四)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「福原麟太郎氏 年末より年始にかけて郷里広島県に帰省。氏の住所は、(略)。」

16 三月一日 九二巻三号 二八(九二)頁

【原子爆弾】 「英語クラブ」、山屋三郎 「Explosive Uranium, Plutonium その他」

「本誌第九十一巻第九・十号の154頁に掲げられた「New GE X-Ray」の記事中、「Explosive uranium [sic], and other atoms」とある言葉には何らの註も加へられてゐないが、これらの言葉はアメリカでも新語中の新語であつて(といふのはこれらの言葉は原子爆

弾の發表後にはじめて流布されはじめた) 我が国ではまだ恐らく一般の人々には知られてゐないと思はれるから次に簡単に説明しよう。(後略)」

17 同右 三二(九六)頁

【原子爆弾】 広告「時事英語研究三月号」

※金生喜造「原子爆弾往来(訳注解説)」という記事が掲載されているのが分かる。

18 四月一日 九二巻四号 三一(一二七)頁

【原子爆弾】 「片々録」、「ユナイテッド・ニュース」

「長い間我々から遠ざかつてゐた米国映画も二月二十八日の「キユーリー夫人」、「春の序曲」の封切りから愈々本格的になつて来た。同時に封切られた「ユナイテッド・ニュース第百七十八号」は「一九四五年の回顧」と題した特輯であつた。この一年間に起こつた歴史的な大事件を一巻に収めた貴重な記録であつたがその内容は次の如きものであつた。レントシユテッド攻勢、米英軍ノルマンディ上陸、伯林陥落、ル大統領四選、ヤルタ会談、ル大統領死去、トルーマン大統領就任、独軍無条件降伏と調印、太平洋戦線と神風特攻隊、沖繩作戦、原子爆弾と日本の降伏、ミゾリー艦上での調印式、マニラの残虐行為、日本の戦争犯罪人、独逸の戦争犯罪人処刑、ムソリーニ民衆の手で殺害さる、ニユーロンベルグの国際裁判、サンフランシスコ憲章。」

19 五月一日 九二巻五号 九(一三七)頁

【原子爆弾】 「G. B. Shaw と A. A. Milne」

「今度は Shaw 翁が原子爆弾に対する見解を発表した。曰く。『原子爆弾は戦争を儲からないもの (unprofitable) にした。それ故時代遅れだ。誰が原子爆弾なんか使ひたいと思ふものか。』(後略)」

20 七月一日 九二卷七号 一七 (二〇九) 頁

【広島】 市河三喜「沢村君の思ひ出」

「昨年の七月七日甲府市の震災に沢村 (※寅二郎) 君が犠牲者となられたことは、その後広島市の爆撃に竹中利一君が逝去されたのと共に、我が国の英語界にとつて大きな損失であつた。(後略)」

21 八月一日 九二卷八号 一五 (二三九) 頁

【原子爆弾 Aton Bomb】 「Operation Crossroads」

「七月一日、太平洋上の一環礁ビキニに原子爆弾第四号 (Aton Bomb No.4) が投下されたが、このビキニ環礁に於ける原子爆弾の効力試験を米国では“Operation Crossroads”(実験十字路) と呼んでゐる。(後略)」

22 同右 二三―四 (二四七―八) 頁

【Atomic Bomb】 「HOME AND FOREIGN NEWS: ATOMIC BOMB DROPPED IN HISTORIC BIKINI TEST」

※記事本文省略。

23 同右 三三―(二五六) 頁

【原子爆弾 A-bomb】 広告「研究社米語辞典」

※(前略) アメリカの新聞や雑誌にざらに出てくる斯うした米語が本辞典にはふんだんに収めてあります。何しろ掲載してある第一番目の語が A-bomb (原子爆弾) なのですから、その威力たるや全く空怖ろしい限りです。」

24 九月一日 九二卷九号 三一 (二八七) 頁

【広島 原子爆弾】 「片々録」, 「広島文理大高師英語科の異動」

「広島学園英語科のスタフも昨年の原子爆弾の惨劇以来多大の變化を蒙つた。即ち竹中利一(大学)、永原敏夫(高師)の両犠牲者を出した外、門脇願珠教授はすでに昨春郷地福井県に引退せられ、須貝清一氏は本誌五月号にある通り、昨秋青森師範学校長に転出せられ、浅地昇教授其後を襲ふて英語部長並に主任として目下活躍中。最近に至つて和歌山商業から出口義勇氏、京都二中から吉村清氏、元海軍教授東田千秋氏を迎へ、更に新秋までには尚一、二新任者を加へ、陣容を新たにし面目を一新して大いに学界のため貢献する積りである。因に丸山学氏は本年四月頃退官せられ、目下熊本語学専門学校の校長格として活躍中。又附中の宮崎荷吾氏は郷里佐賀師範に転出、最近河野喜好氏は南方より帰還、松本鐘一氏は三月復員目下待機中。大学の古賀哲夫助手は病氣療養中なるも他は夫々健在。尚当分の中、大学文科は江田島津久茂国民学校で、高師は賀茂郡乃美尾村元海軍衛生学校跡で、附中は西條市国民学校でそれぞれ授業継続の筈。(七月二十一日、NA(報))」

25 一〇月一日 九二卷一〇号 一六 (三〇四) 頁

【原子エネルギー】 「新しい米国地図」

「米国 National Geographic Society の合衆国新地図は戦時活動を反映する新地名が相当加へられるといふが、例えば原子エネルギー研究で一躍有名になつた Oak Ridge (Ten) と Richmond (Wa) が新都市として初めて登載されるといふ。(後略)」

26 同右 三一(三一九)頁

【広島】 「片々録」、個人消息」

「福原麟太郎氏 八月中旬広島県に帰省。」

27 十一月一日 九二巻一一号 一五一六(三三五一六)頁

【原子爆弾】 Y. F.^⑤ 「米英消息」 「National War College」

※「米国の地理的位置がいざとなつても常に多少の時間的有餘を米國に与へてゐた。ところが原子爆弾をはじめ兵器一般に革命的变化の現れた現在、もはや米國もこの特惠に晏如としてゐられなくなつた」ため、「今度新たに Washington National War College といふのが設立された」といふ記事。

28 同右 二八(三四八)頁

【原子爆弾 A-bomb】 S. K.^⑥ 「湖畔通信」

「(前略) 七月には(※高部義信が)「研究社米語辞典」を英学界に提供したのであつた。(中略) 先づ A の部を見ると、一番初めに A-bomb 原子爆弾 (atomic-bomb) がチャント出て居る。これは新たに補足した語で、どの辞典にもないのである。(後略)」

29 同右 二九(三四九)頁

【広島】 「片々録」、R. F.^⑦ 「英学時評」

「(前略) 戦災の損害を最もひどく受けたのは広島文理大である。主任教授を失ひ、蔵書の大半以上を焼失したといふ。教授には幸ひ木方博士はじめ山本、小川の諸氏があつて跡を埋めるに十分であらうけれども圖書の喪失に至つては急に取り返しがつかない。もと小日向教授の室にあつたバラッド関係の貴重書蒐集が疎開してあつて難を逃れたといふことは何よりであつた。嘗々復興を望む。(後略)」

30 同右 三一(三五一)頁

【広島】 「各大学英文科講義題目 広島文理大」

※英国劇史、中世英語、文学概論、Chaucer: *The Canterbury Tales* 講読、以上木方庸助が担当、各週二時間。英文法講義、言語学講義、以上山本忠雄担当、各週二時間。英文学通史、Tennyson: *In Memoriam* 講読、D. G. Rossetti: *Poems* 講読、以上小川二郎担当、各週二時間。

31 十一月一日 九二巻一二号 一一(三六三)頁

【原子爆弾】 「Neptunium isotope 237」

「(前略) 「但しこの物質の大量生産は前二者(※ Uranium 235 と plutonium) 以上に困難であり、原子爆弾製造用には使用出来ないといふ。(後略)」

32 同右 三一(三八三)頁

【広島】 「片々録」、個人消息

宇津木騶太郎氏 撰南工專に出講。七月末より九州の令兄や令嬢のところへ赴き九月上旬豊中の自宅に帰つた。その途次広島では佐伯好郎博士を訪ねた。」

一九四七年

33 一月一日 九三卷一号 六三(六三)頁

【広島】 「片々録」、南山外国語専門学校開設」

※英語科の教授陣の中に「河合茂(元広島高師教授)」の名前がある。

34 同右 六四(六四)頁

【長崎 原子爆弾】 「片々録」、個人消息

「江副秀喜氏 一昨年の長崎に於ける原子爆弾には全家無事。昨秋海星中学を辞して長崎水上警察署に通訳と勤務。」

35 三月一日 九三卷二号⁽³⁰⁾ 一一二(八五 六)頁

【原子爆弾 Hiroshima】 F.H.R.⁽³¹⁾ 「米英消息」、**「昨年の米国出版界」**「**原子学者の警告**」

「(前略) 原子爆弾の恐怖は出版界をも蔽ひ、原子学者達の合作になる *One World or None* が出た。「原子爆弾に対する防御は不可能なり」といふ命題の証明に終わったこの本は一時世を騒がせた。John Hersey の *Hiroshima* は貴重な現地報告であつた。科学書では爆弾に対する William Laurence の *Dawn Over Zero* (中略) 等

がその方面では top に位するといふ。(中略) / Albert Einstein

Harold C. Urey, Leo Szilard, Hans A. Bethe などを初めとして米国に居る錚々たる原子学者九名を以て構成される原子科学者緊急委員会 (Emergency Committee of Atomic Scientists) は原子時代に対処して人類に対し次の六ヶ條の警告を発した。即ち(一)原子爆弾は今日に於ては経費も少なく且つ大量に生産され得る。破壊力も一層大になるであらう。(二)原子爆弾に対する軍事的防御手段は現在一つもなく、将来も期待できない。(三)米国外の国家も独力で原子爆弾製造の秘密行程を発見し得る。(四)原子戦に対する戦備をしたところで無駄であり、而も尚且この戦備を行はうとするならば我々の社会秩序の機構は破壊する他ない。(五)若し今後戦争が勃発するやうなことがあれば、原子爆弾の使用は避け難く、人類文明の崩壊は必然である。(六)この問題の解決策としては原子エネルギーの国際管理と、かくすることによつて遂に戦争を根絶する以外にはない。」

36 四月一日 九三卷三号 三一(二二七)頁

【広島】 「片々録」、個人消息

「桜井役氏 広島女子高等師範学校長に補せらる。」

37 同右 三一(二二七)頁

【広島】 「昭和二十一年度各大学英文科卒業生論文題目(広島文理大)」

※ On Irene of The Forsyte Saga (加藤清一)・ A Study on Phrases and Idioms from *The Adventure of Oliver Twist* (黒瀬保)・ Matthew Arnold

as a Critic (齋藤正一)

38 五月一日 九三卷四号 二六(一五四)頁

【A-Bomb】 「読者クラブ」、大場正史「米語二三」

「(前略) 尚 OSRD は Office of Scientific Research and Defense が省略されたやうにいられるが、私の扱った原子力関係の資料では Office of Scientific Research and Development (因にこれはブッシュ博士の A-Bomb 研究によつて一躍有名になつた機関で、また develop は一つの idea から具象的なものを生み出すことを意味する) とのみあり、寡聞の爲か未だ前者が別に存在するか知らない。(後略)」

39 同右 三〇(一五八)頁

【広島】 「片々録」、愛知県中等英語科教員の結束」

※「愛知県中等学校英語科教職員会」の設立委員として「一宮高女長」の「加藤清(広島高師英語科出身)」の名前がある。

40 同右 三一(一五九)頁

【広島】 「片々録」、個人消息」

「福原麟太郎氏 三月二十一日より四月十日まで郷里広島県へ帰省」、「古川善四郎氏 広島県福山誠之館中学を辞す」、「東田千秋氏 二月八日附広島高等師範学校教授に補せらる。住所(略)」、「小山東一氏 広島師範学校に任せらる」、「佐伯好郎博士 広島市外二十日市に疎開中であるが、今度二十日市町長に公選された。又博士は広島アテナヤム協会会長で毎週講演する」。

41 六月一日 九三卷五号 三一(一九一)頁

【広島】 「片々録」、広島文理大のシェイクスピア祭」

「四月二十三日広島文理大は Shakespeare 祭を下記の通り催した。英国に於ける沙翁祭に就いて 木方庸助 2. *Macbeth* に現れた罪惡について 出口義勇 3. Shakespeare Music (学生コーラス)」

42 七月一日 九三卷六号 三一(二二三)頁

【広島】 「各大学英文科講義題目(広島文理大)」

※演劇起源論、文学概論、Marlowe: *Doctor Faustus* 講読、Shelley: *A Defence of Poetry* 講読、Chaucer: *Canterbury Tales* 講読、以上木方庸助担当、各講義週二時間。言語学概論、英文法講義、Shakespeare: *King Lear* 講読、以上山本忠雄担当、各講義週二時間。英文学通史(本年は Milton より)、Wordsworth: *The Prelude* 講読、Keats: *Endymion* 講読、Emerson: *The American Scholar* 他、小川二郎担当、各講義週二時間。

43 九月一日 九三卷八号 三一(二八七)頁

【広島】 「片々録」、アメリカから教科書」

「我が国教科書作成の参考資料として、この程アメリカから各部門にわたる総数 4023 冊の教科書と参考書がマ司令部を通じて文部省に寄贈された。これは最近米国で発行されたものの中、米国の専門家たちが最良のものとして厳選したもので(中略) 全国の設置場所は、札幌市(北大)、仙台市(東北大)、東京都(東京文理大、第二師範女子部)、名古屋市(市立教育研究所)、金沢市(金沢高師)、京都市(京大)、大阪市(大阪第一師範)、広島市(広島文理大)、丸亀

市(香川師範) 福岡市(九大)である。なほこの寄贈は今後も引き続き計画されてゐる。」

44 同右 三一(二八七)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「福原麟太郎氏 八月四日離京高松市の講演会に赴き、中旬まで広島県に帰省。」

45 一〇月一日 九三卷九号 二九(三一七)頁

【広島】 S.K. 「湖畔便り」

「四月の全国市町村長選挙で広島市外二十日市町長に当選した佐伯好郎博士は博士町長と新聞にも書き立てられた。(後略)」

※佐伯の経歴やエピソードが詳細に述べられている。

46 同右 三〇(三二八)頁

【広島】 「片々録」、「日本文学会地方大会開催予告」

「西部大会は来る十一月月上旬(二・三日の予定) 広島市東千田町広島文理科大学に於て開催される。(後略) (日本文学会広告)」

47 同右 三一(三二九)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「福原麟太郎氏 高松での講演及び広島県帰省取止。」

48 一〇月十五日 九三卷一〇号 二三(三四三)頁

【原子爆弾】 F.H.R. 「米英消息」、「声帯撮影」

※「アメリカの Bell Telephone System の研究所では活動している声帯を写真にとることに成功し」たが、そのカメラは「Bikini」の原子爆弾実験の際に使用されたカメラと同種のものであるといふ。

49 十二月一日 九三卷二二号 三一(四一五)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「福原麟太郎氏 十一月二日、三日の日本文学会広島大会に出席、兼ねて九日まで帰省」、「山本忠雄氏 広島文理科大学教授に任ぜらるる」。

50 同右 三一(四一五)頁

【広島】 「各大学英文科卒業生論文題目(二十二年九月)」、「広島文理大」

※ A Study on William Blake in the "Marriage Of Heaven And Hell" (織谷馨) On Characters in Thomas Hardy's Representative Works (安永義夫) On Tragedies of Farmers in Eugene O'Neill's Works (宮崎司郎) A Study in the Tragedy of Hamlet (中里穂束) A Study of Semantic Changes of English Words (倉田達)

一九四八年

51 一月一日 九四卷一号 二六(二二六)頁

【広島 原子砂漠】 「日本文学会地方大会」、「西部大会」

「二十二年度日本文学会西部大会は十一月二、三日の両日に

互り広島文理科大学に於て開催、東は東京より西は九州の果てに及び参加者多数集り、さながらの原子砂漠に名実共に充実せる英文学会の開かれた事はまさに国家的事業と称すべく、英文学健在なりの感を一同の胸に強く銘ぜせしむるものがあつた。(後略) ※発表には以下のものがあつた。「次に来るもの(雑賀忠義氏) 文学的考證に基づいた氏独自に 'nomical' な社会観想」、*Ballad of 英語* (山本忠雄氏) 単純な *ballad* 英語が如何にして変化と活力に富む詩形に適合し得たか、これを可能ならしめた十五世紀の英語の事情及び方言の混入、語形の不安定、英語の伸縮性等に関する説明」。

52 同右 三〇(三〇)頁

【広島】 「片々録」、R. E. 「英学時評」

※「日本英文学会は秋には仙台、広島、東京、三つの地方大会を催ふして、新しい企てに成功した」こと、広島の大会では汽車の遅れのため遅刻したこと、広島の廿日市の町長になつた佐伯に会つた等々の記述がある。

53 同右 九四巻一号 三一(三一)頁

【広島】 「片々録」、 「英語教育」 復刊」

「広島文理科大学英語教育研究所編輯発行の「英語教育」は昭和十八年十一月発行の第八巻第二号を以て休刊し、その間「語学教育」と合併の形になつていたが、昨年末四年振りで復刊第一号を出した。今後当分季刊として続けていく予定である。」

54 同右 九四巻一号 三二(三二)頁

【広島】 「新聞雑誌英学一覽」、「評論及び講話」

※「英語教育(九巻一号)」には「John Hersey の「広島」(梶井迪夫)」という論文が掲載されている。

55 二月一日 九四巻二号 二九(六一)頁

【広島】 「片々録」、N. R. 「昭和二十二年度英学界」

「(前略) 日本英文学界は全国大会の他、仙台、広島、東京と画期的な地方大会を催した。その主催するシェイクスピア記念講演会にもぎやかであつた。(後略)」

56 同右 三〇—(六一—三)頁

【広島】 「片々録」、 「広島女学院専門学校便り」

「昨年六月二日終戦後最初の校内英語弁論大会が松本院長及び松下、Maemilian 両教授を judges として牛田山麓の仮校舎講堂で行われた。英文、被服、保健各部からの参加者十数名。その中から英文科一年沖本、同二年の佐々木の両嬢が選抜されて英文毎日二十五周年記念マカーサー元帥杯争奪全国英語弁論大会中国地区予選大会(六月八日)に出席、佐々木嬢は第一位を得て大阪に於ける決勝大会に中国地区代表として出席、時間超過のため惜敗。愛校際(十一月二日—九日)プログラムの一として英文科二年(現在三年欠)の学生により Galsworthy の *Escape* から四場を選んで桑田教授演出、Maemilian、高田両教授指導の下に十一月七・八日の両日、流川に夏新築成つた高女部校舎講堂で英語劇が催された。語学力の一般低下と出し物が少し too ambitious などの多少心配

されたが、先生方の熱心な指導と学生達の不撓の勉強と協力により成功を収めることが出来た。往年の広島女学院英語劇の面目を偲はしめるものがあつた。(加藤正男氏報)

57 同右 三一(六三)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「加藤正男氏 広島女子学院専門学校教授となる。住所は(略)。」

58 三月一日 九四卷三号 二二(八六)頁

【原子爆弾】 F. H. R. 「米英消息」、「ドーヴァー海峡トンネル案」

「英国とフランスを海底トンネルで結ぼうという計画が英仏両当局者間で進められているという。(中略)完成の暁には、英仏間の交通が極めて便利になることは勿論だが、この通路は海底のものだけに、一切の爆弾、原子爆弾に対してすら安全であることが強調されている。」

59 四月一日 九四卷四号 三一(二二七)頁

【広島 原爆】 「片々録」、「個人消息」

「小日向定次郎氏 『お便り申し上げる機会もなく広島原爆にやられていろいろ苦勞を重ねて終に東京に住むことになりました。今二男の家に居ります。・・・すつかり健康を損じ殊に神経痛で手足が不自由になりました。(一月廿八日)』(前号参照)」

60 四月一〇日 「五十周年記念号」 四八頁

【原子爆弾 広島】 小日向定次郎「英語青年愛読の思い出」

「(前略)原子爆弾で広島市は焼野となり、勿論私の家も焼け、蔵書も悉皆焼き失ひ、従つて英語英文学研究室にあつた奇贈した英語青年も焼け亡びてしまつたのだつた。広島市からは劫火に逐はれ、避難先からは洪水に追はれ、苦難の三力年を過ごして、四十何年振り再び故郷の東京に転入して、やつと阿佐ヶ谷の二男の家に落ちつくことが出来た。／何を書かうにも、今手許に一冊の参考書もない。十三力年もかかつて、広島文理大の研究室に集めた英国の民謡に関する文献を懐かしみつつ読むことが出来たら、(中略)何か書くことも出来るのにと、無益な年寄の繰言になつて終つたけれども、英語青年愛読の私の五十年に近い思ひ出には間違ひないのである。」

61 五月一日 九四卷五号 二一(一四九)頁

【Atomic scientists】 「HOME AND FOREIGN NEWS: ATOMIC SCIENTISTS ADVOCATE STARTING WORLD GOVERNMENT」
※アインシュタイン他の科学者による文明崩壊の警告に関する記事。

62 同右 三〇(一五八)頁

【広島】 「各大学英文科卒業生論文題目」、「広島文理大」
※ The Significance of the Frontier in American Literature (清水春雄) 、
A Study of Shakespeare's Fools (菅沼宗一) 、
A Study of Jonathan Swift with a Special Reference to *Gulliver's Travels* (柴垣又男) 、
A Study of Thomas Hardy (河上道生) 、
On Similes Used by R. L. Stevenson (富

田幸雄) 'The Grammatical Peculiarities of Adverbs & Verbs in American English (定地憲次)

63 六月一日 九四卷六号 二二(一八二)頁

【原子爆弾】 F. H. R. 「米英消息」 「Toynbee の Civilization on Trial」 「(前略) 今日この世界統一を妨げうるものが唯一ある。それは原子爆弾による、すべての世界主要文明の破壊である。しかしたとえ原子爆弾が落ちても、まだ一縷の望みが繋がっている」と Toynbee は考える。原子爆弾によつて消滅することなく、今日人類の遺産を、たとえその極めて僅かな部分であつても、継ぎうるものに、中部アフリカ土人ネグリートがある。そしてもしこの安全域内に逃げているこの矮小黒人でさえも、原子爆弾の炸裂ではねとばされてしまうとすれば、後に残された地球は、人類の歴史十数万年に比して遙かに古い二億五千万年の生存の歴史を持つ翅虫類 (winged insects) に引き渡されるであろう。(後略)」

64 同右 三〇(一九〇)頁

【広島】 「片々録」、 「広島の新エイクスピア祭」 「広島の新エイクスピア祭は四月二十五日(日)、広島文理大、広島高師、広島女学院の各英文科共同主催の下に、広島女学院講堂に於て行われた。長田新氏「学生と演劇」、木方庸助氏「エイクスピア祭について」、小川二郎氏「エイクスピアの描いた女性について」、垣田直己氏「演出にあつて」の各講演の後、三校男女学生合同出演の英語劇 *Romeo and Juliet* を上演した。(中略) 午前は学生、午後は一般も対象に上演されたが、いずれも超

満員で、進駐軍将兵も多数来場した。広島に於てはこれを機として毎年エイクスピア祭に英語劇の上演を計画している。(広島文理大英文学研究室報)」

65 同右 三一(一九一)頁

【広島】 「各大学英文科講義題目」、 「広島文理大」 ※文学概論、英国劇史、Chaucer: *Canterbury Tales*, Preface, &c. (講読)、『Everyman』 and Other Miracle Plays (講読)、『Newman: On University Education, &c. (講読)』、以上木方庸助担当、各講義週二時間。英文法概論、言語学概論、Spenser: *Faerie Queene* (講読)、『Longfellow: *Evangeline*, &c. Carlyle: *Past and Present*』以上山本忠雄担当、各講義週二時間。英文学史、Shakespeare: *King Lear* (講読)、『Wordsworth: *Poems*』 Emerson: *Representative Men*』以上小川二郎担当、各講義週二時間。

66 七月一日 九四卷七号 二九(二二二)頁

【広島】 S. K. 「湖畔便り」 ※早稲田出身の英文学者、宇津木驩太郎(四月一三日に逝去)の「長女は広島文理大教授文博杉本直次郎氏の夫人」という記述がある。

67 八月一日 九四卷八号 二五(二四九)頁

【atomic cloud】 「英語クラブ」、Z-bomb⁽¹²⁾ 「新々語雑記」 「英語青年五十周年記念号の岡部氏の新語雑記に挙げられた語の大部分は1943年以前の語である。Britannicaの *Book of the Year*

1946 及同 1947 の New words and meanings の項 (アメリカ方言協会新語調査委員会々長 I. Willis Russell 氏執筆) を見ると新語の使われはじめた年も記入してかなり多く集めて居るが、大部分が 1943-1946 までのもので且 radar, atom 関係の語が断然多く次ぎは航空機、化学、薬学、軍事関係のものとなつて居る。(中略) 参考までに 1946 年生れの新語を挙げると (但し永生きしそうなものだけにする) atomic cloud, americium (Element No.96) (後略)]

68 同右 三二(二五六)頁

【広島】 広告「研究社 新英語教育講座 全十二巻」

※第二巻「英語読本 (Let's Learn English) の扱い方 巻三」に小川二郎 (広高師教授)、第三巻の「英語の語彙と慣用句」に山本忠雄 (広文理大教授) と梶田迪夫 (広高師教授)、「英語の綴方」に松本鐘一 (広高師付中)、「英習法」に篠田治夫 (広高師付中) が寄稿してゐる。(3)

69 九月一日 九四卷九号 三〇(二八六)頁

【広島】 「片々録」、「英文学関係の季刊雑誌」

〔前略〕七月には広島島の文科評論社から English の第一号が出た。A5 版 100 頁の雑誌で、文学、語学、教授法等、広い範囲にわたつて、自由な気持で掲載して行く方針らしい。小川二郎氏が主幹になつてゐる。これも季刊である。(後略)]

70 九月一日 九四卷九号 三〇—一(二八六—七)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「Mr. Harry Collins (元広島文理大米人講師) 今度の戦争の直前に日本を去つた同氏は、目下ハワイのホノルルに家を持ち、彼の地の大学で教えてゐる。相変わらず独身で、一人の学生と一匹の犬が生活を共にしてゐる。宛名では(略)。」

71 一〇月一日 九四卷一〇号 二三(三一一)頁

【原子爆弾】 F.H.R. 「米英消息」、「三〇小説」

「最近 Aldous Huxley, Erskine Caldwell, Upton Sinclair の三人がそれぞれ新作を発表した。Huxley のは *Ape and Essence* (205pp., Harper, \$2.50) というので、これは作者としては *Brave New World* の系統を引く未来小説である。時は二十二世紀、第三次世界大戦の原子爆弾による破壊を免れた地球上の少数の地点の一つ New Zealand を出発、探検の旅に登つた科学者 D. Poole は北米西海岸に、かつての人間文化の荒廢の跡を発見する。その昔繁栄を誇つた California に、今はコロンプス以前のインディアンと余り変らぬ程度の技術をしか有せず、道徳面ではそれよりもなお劣悪な、土色をした気の抜けた奴隸人種が棲息している。彼らの首長は悪魔 Belial び、"the Other One" (神) を倒して勢力を得ようとする彼の戦いは、すでに数世紀前から始まつていたことは事実であるが、「原子戦争」中に彼は確固たる勝利を得たのである。こうして Huxley は Dr. Poole の見聞を通じて原子戦争後の世界を描き出す。(中略) Toynebee の *Civilization on Trial* と云ふ、Huxley のこの書と言ひ、原子爆弾の恐怖におびえる今日のわれわれの不安を端的に示したものであり、また岐路に立つ人類への一警鐘であろう。(後略)]

72 同右 三〇(三二八)頁

【広島】 「片々録」、「日本英文学会地方大会」

「下記により地方大会を開催致します。(中略)中国四国地方大会 十一月六、七日 於広島文理大(中略)尚中国四国大会は講演申込期限は十月卅日で、(宿泊所の世話を希望の向はその旨を書添え)広島文理大英文学研究室内福田民男宛お申込み下さい。(日本英文学会広告)」

73 十一月一日 九四卷一―号 二〇(三四〇)頁

【atomic war 原子戦争】 「HOME AND FOREIGN NEWS: BERLIN CRISIS MAY WRECK UNITED NATIONS, BRITISH LEADER WARNS」

※ベルリン問題のため国連の崩壊もあり得るといふ記事中に、「Black fury of an atomic war」(注では「黒いヴェールの復讐の女神とも言うべき原子戦争」といふ言葉がある)。

74 同右 二二(三四一)頁

【A-Power Unit】 「HOME AND FOREIGN NEWS: AMERICA TO BUILD 1ST A-POWER UNIT」

※記事本文省略。

75 同右 三二(三五二)頁

【広島】 広告「季刊 ENGLISH 第2号(10月刊)」

※発刊元が「広島市革屋町(略)」の「文化評論社」。⁽¹⁴⁾

一九四九年

76 一月一日 九五卷一号 二七(二七)頁

【広島】 「日本英文学会地方大会」, M.T.⁽¹⁵⁾ 「中国四国地方大会」

「九州地方が独立して地方大会を開いたため、参会者に若干の減少は見たが、而も百数十名の会員の出席を得て、中国四国地方大会は十一月六(土)、七(日)日の両日、例年の如く広島文理科大学に於て開催された。(後略)」

※発表には次のものがあつた。「東田千秋氏「Swiftの散文について」(Gulliver's Travelsの文体をその文構造から論究す)」、「安永義夫氏「A Pair of Blue Eyesに就て」(その梗概を述べてHardyの運命観を論述す)」、「福田民男氏「Milton's Mind in Samson Agonistes」(Samsonの中に現れたMiltonの哲学精神・irony等の諸要素によつてそのmindを見る)」、「木方庸助氏「Anne Sayer of the Three Estatesの詩形とSwearings」(表題事項についての詳細なる実証的研究)」。なお、運営としては木方、司会として小川、雑質の名前が挙つてゐる。

77 同右 三二(三二二)頁

【広島】 「季刊 ENGLISH 第3号(1月刊)」

※75と同様の、第三号の広告。

78 二月一日 九五卷二号 二八一―九(六〇―)頁

【広島】 「片々録」、N. R. T. 「昭和二十三年度英学界」

〔前略〕英学界のにぎやかさは、定期刊行物に一等よくあらわれている。英学関係の多くの定期刊行物が出た。それらが地方に分散しているのもいじめるしいことである。日本英文学会の「英文学研究」が復刊した。広島は「English」、京都の「アメリカ文学」、矢野、島田両氏の「英文学」、滝口直太郎氏らの「新英米文学」、曾根保氏らの「英詩研究」、新月社の「不死鳥」がある。(後略)

79 同右 二九 三〇(六一)頁

【広島】 「片々録」、「ブランデン氏の広島講義」

「Edmund Blunden 氏は十二月初め広島に赴き、四日広島女学院講堂に於て「イギリス人の心情」と題して一般市民有志に講演した。六日、七日の両日は広島文理大附属小学校講堂で特別講義を行つた。六日「シェイクスピア悲劇」、七日「イギリス現代作家」についてであつた。いずれも午前十時から正午まで、聴衆は学生が主で、その数は約千名であつた。なお、広島文理科大英文学研究室では季刊の論文集を近く発行する予定である。誌名は *Umi* と決まつた。(福田民男氏報)」

80 同右 三〇(六一)頁

【広島】 「片々録」、「岐阜英語教育研究会」

※同研究会発足(一九四八年十一月)後の第一回研究会(十二月十一日)では「元広島高師教授河合茂氏の米語に関する講演を聞いた」という。

81 同右 三〇(六一)頁

【Hiroshima 原子爆弾】 「片々録」、「John Hersey 氏の作品翻訳許可」

「戦後アメリカ読書界に原子爆弾物語として好評を博し、ベストセラーズの一つに数えられている *Hiroshima* と、これまた種々の問題を起した *The Bell for Adano*」 John Hersey 氏のこの二つの作品が日本で翻訳出版される。著者 Hersey 氏は、日本訳の印税は、広島市内の慈善事業に全額寄付すると申し出ているといわれる。」

82 同右 三〇(六一)頁

【広島】 「片々録」、「神谷弘氏逝く」

「広島高等師範学校英語科主任教授神谷弘氏は昨年十一月二十五日、広島市細工町島病院にて急性腹膜炎のため逝去した、享年三十八。氏は一昨年の英文学会(京都)では「微風について」と題してコールリッチその他の詩人研究を発表し、その他諸雑誌にも研究を発表していた。最近 *English*, 2 に H.K. の頭文字で「ステラとバナッサ」を書いている。専門はキーツの研究であつた。また若くして広島高師英語科主任の職責に任じていた。自宅は略)、遺族は夫人と子供二人である。なお同氏の遺稿はとりまとめて広島文化評論社より出版される予定という。」

83 三月一日 九五卷三号 三〇(九四)頁

【Hiroshima 広島】 「片々録」、「風と共に去りぬ」再版許可」

「(前略) 前号の本欄で報じた John Hersey の翻訳の訳者及び発行所は、*Hiroshima* の方は本書の中心人物である広島流河教会の谷本清牧師と石川欣一氏の共訳(約150頁)で法政大学出版局発行、*Bell for Adano* の方は杉本喬氏の訳(約450頁)で東西出版社の発行である。」

84 四月一日 九五巻四号 二〇一一(二一六七)頁

【atomic bomb】 「HOME AND FOREIGN NEWS: B-50 CIRLES GLOBE IN NONSTOP FLIGHT」

※この記事は、カーチス・ルメイ戦略航空軍団司令官が、空中給油すれば「ロシアのどこにでも原子爆弾を投下できる」ということであろうか」と訪ねられた際に、「少し当惑しつつ」「Let us say any place that would require an atomic bomb.」と答えたといひ、エピソードを紹介している。

85 六月一日 九五巻六号 八一九(二〇〇一)頁

【原子爆弾】 上田勤「*APE AND ESSENCE*—Huxley の新作」

「(前略) 原子爆弾、毒ガス、細菌等を縦横に駆使した第三次世界大戦で荒廃に帰したアメリカを、たまたまその位置が太平洋の真中にあつたために戦禍を免れた New Zealand の探検隊が、帆船に乗つて調査に行く。戦争後二世紀余を経た2108年2月20日のことである。(後略)」

86 同右 二二(二二三)頁

【atomic weapon】 「HOME AND FOREIGN NEWS: COMMUNIST

BLASTS U.S. AS PEACE CONGRESS OPENS」

※World Peace Congress において、フランスの物理学者、フレデリック・ジョリオ・キュリー博士(当時は「France's Communist Atomic Energy Commissioner」)がアメリカを批判しつつ、「The Atomic weapon will not be decisive in a world conflict」と述べた等々、この記事。

87 同右 三七(二二九)頁

【広島 原爆 *Hiroshima*】 「英語クラブ」池田義一郎「*The Bomb That Fell on America*」

「We used it to destroy a hundred thousand men, women and children! / God, have mercy on our own children! / God, have mercy on America! 広島に落ちた原爆について、アメリカの良心の声として書かれた62頁の長詩「*The Bomb That Fell on America*」の一節。

戦後文学の最も注目すべき作品の一つとして New York Times 其他に紹介された。作者は Herman Hagedorn (此の独逸系の名は英語で Hawthorne にあたると)、アメリカ軍の教科書によく参考としてあげられている *Life of Theodore Roosevelt* や *The Book of Courage* を書いた文筆界の veteran である。同詩は三部から成り、幾万の女子供が雲散霧消 (They dissolved, they evaporated) した広島悲劇、ニウ・メキシコの原野で例の Dr. Oppenheimer (Time, Nov. 8, 48 又は *Reader's Digest*, Feb. 49) 以下の原子学者が集まつて最初の試験を行つた息づまるような光景、アメリカの良心と神との対決、原子力を支配する唯一のものとして人の魂にこもる力を、「release」する必要」の順で歌われている。ふとした機縁で此の書を作

貰つた私は、広島で死んだ私達の不幸な同胞にとつて、これは何よりの鎮魂歌と思つて旨を書き送つたところ、此の三月作者から「Nothing that anybody has said in this country touches me so closely as your saying²」云々と返事があり、目下アメリカで講演旅行中の Mr. Kiyoshi Tanimoto から此の詩の翻訳申込が来て、近く二週間、同氏との会見を楽しんで待つてゐるともつた。此のしらせは私をよろこばせた。谷本清氏は Hersey の *Hiroshima* に出てくる最も重要な人物で、また同書の訳者でもある。此の原爆生き残りの国際人によつて「アメリカの良心の声」が日本訳になる日を期待したい。」

88 同右 四五(三三七)頁

【広島】 「片々録」、「広島県東部新制高校英語弁論大会」

「広島県東部新制高校英語研究連盟 (E.S.A.) 主催の第一回新制高校英語弁論大会が毎日新聞社の後援によつて二月十二日 (土) 午後一時より福山市誠之館高等学校講堂に於て開催された。米広島軍政部民間情報課長 Miss Eleanor A. Graham 及び英連邦岡山情報部 Mr. David Hogan の審査のもとに、福山葦陽高校三年の和田三重子嬢が、'English as a Common World Language' の演題で優勝、第二位は誠之館高校一年大塚保男君、第三位は同じく三年の藤井正章君であつた。引きつづき多彩な英語学芸発表会があり、午後七時盛会裡に幕を閉じた。(Y. Otsuka 生⁹報)」

89 同右 四五—一六(三三七—一八)頁

【広島】 「各大学英文科卒業論文題目」、「広島文理大」

※ Faustbuch and Dr. Faustus (今井則夫) 'The Problem of 'the Double Self' ; Mainly in Heathcliff in *Wuthering Heights* (家本敏幸) 'A Study of *Comus*, A Masque (越智英一)' 'Some Thoughts on Shakespearean Use of "of" (垣田直巳)' 'Reality and Joy as Expressed in J. M. Synge (塩次喜八郎)' 'On James Joyce's *A Portrait of the Artist as a Young Man* (坂田実幸)' 'A Study of George Eliot's Moral Philosophy; Chiefly in connection with Her Nature (照先文一)' 'A Study on *Jane Eyre* as Literature of Situation (高城義彦)' 'A Study on the Expression in *Treasure Island* (原田耕夫)' 'On the Tragedies of Henchard and Tess in Thomas Hardy's Works (丸木徹)' 'O. Wilde's Aestheticism in *The Picture of Dorian Gray*' (吉村昭)' 'Hawthorne's Peculiarities [sic] reflected in *The Scarlet Letter*' (渡辺育夫)

90 七月一日 九五卷七号 二七(二六七)頁

【Nagasaki】 「HOME AND FOREIGN NEWS: XAVIER'S PIECE OF CAP PLANNED FOR EXHIBIT」

※記事中心「The piece of the cap and the portion of the Saint's ashes in Nagasaki are said to be his only relics in Japan.」ヤングマンズがある。

91 同右 二八一—九(二六八—九)頁

【原子力】 N.R.T.「オールダス・ハックスレー(英米文学新声)「(前略)近作の *Ape and Essence* は Huxley の作品中、もっともおぞましい (horrible) ものだ」」の論文(※「*The Times Literary Supplement* 本年二月十九日号の主要論文)はつてゐる。映画の台

本の形で書いてあるらしいのであるが、この作品の扱う世界は、第三次世界大戦後の世界の空想図である。第三次世界大戦に使用された原子力の結果、世界はまったく荒廃に帰した。ただ地理上の関係で New Zealand だけは、その災害をまぬかれた。そして New Zealand の科学者の一隊が Los Angeles に上陸して、探検するという形になっている。(後略)』

92 八月一日 九五巻八号 四四(三三三)頁

【広島】 「片々録」、広島文理大の *Urn* その他」

「広島文理科大学英語英文学研究室編集の機関誌 *Urn* の第一号が出た。A Journal of English Literature and Language という副題がついている。本誌の前身は「英語教育」であるが、*Urn* は「英語教育」とはやや趣が異なり、広島文理大英文科の学風を「育て、形あるものとして伝え、外部の批判をうける」ために、自己の「学問の現状を示す」雑誌である。第一号は故神谷弘氏の「微風について」を巻頭において、故人を追悼している。B6版60頁、定価は60円、将来季刊の由。発行所は広島市の文化評論社。(後略)』

93 九月一日 九五巻九号 三四(三七〇)頁

【原子爆弾】 「Lanny Budd もの終る。」

「Upton Sinclair が書き続けて来た現代史とも言うべき、Lanny Budd を主人公とする一連の書きものは、最近出た第十冊目(※の *Shepherd, Speak*) を以て完結したようである。(中略) 1940年代の半ばから最近までを扱っている。Lanny はまづドイツが原子爆弾製造に成功したか否かを探り、Yalta 協定の Harry Hopkins 草案作

成に参与し、大統領 (Boss) の健康を危ぶみ、大統領の死に遭う。大統領の死後はまたヨーロッパへ飛んで Goring に盗んだ美術品の隠し場所を打ち明けさせ、Truman 大統領の依頼で Stalin に会い世界平和を説く。Lanny は今後人道主義的新聞のため力を尽くすことになっている。」

94 同右 四三—四(三七九—八〇)頁

【広島】 「片々録」、広島女学院便り」

「第三回マ元帥杯大学高専英語弁論大会中国地区予選が五月廿四日に開かれ、本学院から専校の中島、尾山の二君が出場。中島君が二位となり、尾山君は昨年は二位であったが本年は惜しくも選外となった。本学院でも四月から新制(女子)大学(本年は英文科文で、将来は文学部、家政学部として各種の科が設置される予定)が牛田山麓に発足した。六月四日新築校舎の一部落成を機に更めて開校式が挙げられ、之を祝して音楽会、英詩朗読及英語劇が催された。劇は *King Lear* (Act I, Scene 1) で、production, direction, setting, costume とも一切が大学、専校の学生の手で行われた。急に計画された為、僅か二週間の日数であったが見事な出来栄であったのは学生達の熱心な努力、協力の賜物である。六月十四日には高校生を主なる対象として公開上演された。六月十八日開催広島二世クラブ主催の英語弁論大会には本学院からは専校の山本、田治の二君出場。田治君が四位となり、山本君は劇の方が忙しかつた為練習不足で選外となった。之につけて *Speech* にしろ、朗読にしろ、劇にしろ、はたまた声楽にしろ、一般に voice production にもつと研究工夫がなされるべきだと思ふ。声に余裕を持たせて

之を control し modulate する事、vocal quality 乃至 vocal variety に
もつと注意が払われて然るべきである。この事は感情表現と連関
してお互いの心にも余裕が出来、之を control し modulate する事
になれば、どんなにか harmonious な美しい感情の世界が出現す
ることだろう。今の日本に最も必要な事の一つではあるまいか。
(加藤〔※正男〕投)

95 一〇月一日 九五卷一〇号 二三(四〇七)頁

[Atom bombed Hiroshima] [HOME AND FOREIGN NEWS:
MARTHUR HONORS NIPPON NATATORS]

※日本の水泳チームが北米遠征に出かける際にマッカーサー元帥に
面会し激励を受けた。その際、'Harvard educated Frank Matsumoto, a
member of the Diet from atom bombed Hiroshima, who will head the
swimming delegation to Los Angeles and Hawaii, introduced each
swimmer to the Supreme Commander.' たつたこと。

96 同右 四四(四二八)頁

【広島】 「片々録」、渡米教授五十名

「アメリカ政府の好意で渡米する留學生が決定七月九日発表され
た。応募者は教員養成関係の教授百六十七名でこのうち女性二名
を交えた五十名が選ばれた。専攻科目別では英語、英文学の二十
六名が一番多く、教育学九名、心理学六名となっている。一行は
八月中旬渡米、九月の新学期から一年各地の大学に分散留学する
予定。(後略)」

※この五〇人中に「近藤敏行(広島師)」の名前がある。

97 同右 四五(四二九)頁

【広島 原爆】 「片々録」、「個人消息」

「Blunden 氏 関西学院大学のために校歌を作った。また八月六
日の広島原爆記念日のために、朝日新聞の薦めに応じて
'Hiroshima' を作った。邦訳はいずれも寿岳文章氏責任の由」、佐
伯好郎博士 国際キリスト教大学設立委員会に出席のため七月末
上京、八月下旬帰広」。

98 同右 四六(四三〇)頁

【広島】 「新聞雑誌英学一覽」、「雑」

※「English (第五号)」には「広島の英文学者(T.N.B.)」と
論文が掲載されている。

99 一〇月一日 九五卷一〇号 三五(四六七)頁

【原爆】 「和文英訳普通科課題」

「(一)トルーマン米大統領は、最近ソ連に原子爆弾があつたと
発表し、続いてソ連のタス通信はすでに一九四七年以来原爆をも
つていたと公表した。(朝日新聞)(後略)」

100 同右 三八(四七〇)頁

【ヒロシマ】 「新刊書架」、高村勝治「ジョン・ハーシー「ア
ダノの鐘」杉木喬訳」

「現代のアメリカ文学界でスタインベック以来のすぐれた新作家
といえはまず「ヒロシマ」の作者ジョン・ハーシー(John Hersey)」

で、その代表作がこの「アダノの鐘」(A Bell for Adano, 1944) である。(後略)

101 同右 四一 二(四七三 四) 頁

【広島】 S. K. 「鶴沼通信」

〔前略〕郷里広島市西郊二十日市の町長としての校務の傍ら支那基督教の研究にいそしんで居る文博佐伯好郎氏は、七月三十日に開かれる国際キリスト教大学創立委員会に列するため八年振りに上京した。(後略)

102 同右 四三(四七五) 頁

【広島】 「片々録」 「新博士三人」

〔前略〕山本博士の学位論文は“Growth and System of the Language of Dickens”と題され、博士が数年来計画中の *Dickens Lexicon* の序論であり、*Dickens* の英語から *Lexicon* の方法の基礎になる事実を論文に纏めたものであった。(中略) 東京大学に論文を提出したのが昭和十九年七月で、学位授与は前期の通り昭和二十一年八月であった。博士は明治三十七年大阪に生れ、大阪高校を経て昭和三年東京大学英文科を卒業した。現在は広島大学教授である。(後略)

103 同右 四四(四七六) 頁

【広島】 「片々録」 「福岡県高校英語科教員再教育講習会」

「八月十九日より廿三日まで、福岡市中央高校に於て催された。講師と題目は、「英詩教授とその鑑賞」(広島文理大、小川二郎氏)。

「英作文教授法及考查方」(広島文理大、梶井迪夫氏) (後略) 」

104 一月一日 九五卷一 二四(五〇四) 頁

【A-bomb】 「HOME AND FOREIGN NEWS: TRUMAN SAYS RUSSIA HAS A-BOMB; HE URGES INTERNATIONAL CONTROL」

※記事本文省略。

105 同右 三七(五一七) 頁

【atomic bombs 原子爆弾】 「英語クラブ」、市川繁次郎「For there to be...」

「The Times Literary Supplement, June 10, 1949, p.375 に次のような文がありました。／＼ Since the dropping of the atomic bombs on Japan in August, 1945, there have been published so many books on the structure of the atom that it would seem [sic] to be impossible for there to be a public sufficiently interested to have read them all. ／＼ (1945年8月の日本に対する原子爆弾投下以来、原子の構造に就ての非常に多数の書物が出版されたので、それらを全部読んだと云う程興味を持つている人々があると云う事は不可能のように思われるであろう。)(後略)」

一九五〇年

106 一月一日 九六卷一 号 二五(二二五) 頁

【atom blast】 「HOME AND FOREIGN NEWS: 2 LARGE

SIBERIAN RIVERS DIVERTED BY ATOM BLASTS]

※記事本文省略。

107 同右 二五(二五)頁

[Atomic armament] 「HOME AND FOREIGN NEWS: TEMPORARY POLITICAL TRUCE BETWEEN SOVIET BLOC AND WEST ASKED BY UNGA HEAD」

※ロムロ国際連合総会議長が東西両陣営に政治的休戦と原子爆弾の配備競争の中止を要望したという記事。

108 同右 二五(二五)頁

[Atomic energy 原子力] 「HOME AND FOREIGN NEWS: JAPAN GRANTED OKAY TO IMPORT ISOTOPES FROM UNITED STATES」

※記事内に“The Atomic Energy Commission”(「原子力委員会」という言葉がある。

109 同右 三三(三三)頁

【原子爆弾】 佐々木高政(担当)「普通和文英訳練習」

※99の答案と解説。

110 同右 四一(四一)頁

【広島】 S.K.「鶴沼通信」

※『支那基督教の研究』を上梓した佐伯好郎の業績について詳細に述べている。

111 同右 四三(四三)頁

【広島】 「片々録」、米留学に学徒百名」

「総司令部の好意で去る七月教員養成関係の大学教授五十名にアメリカ留学の機会が与えられたが、明年は教員ばかりでなく公務員その他公共の福祉に奉仕しようとする学徒百名に米国留学の機会が与えられることになった旨二日文部省から発表された。(中略)第一次の筆記試験は十二月一日に仙台、札幌、東京、名古屋、京都、広島、福岡の各大学で行われ(後略)(「朝日新聞」十一月三日報)」

112 同右 四五(四五)頁

【長崎】 「片々録」、個人消息」

「伊東勇太郎氏 長崎大学経済学部長になる。」

113 二月一日 九六卷二号一二 四(五〇一二)頁

【Hiroshima】 成田成寿「第二次世界大戦中のアメリカ文学」

※John Hersey, *Hiroshima* への言及がある。

114 同右 二七(七五)頁

【atom arms】 「HOME AND FOREIGN NEWS: AMERICA TO TEST NEW ATOM ARMS AT ENIWETOK ISLE」

※記事本文省略。

115 同右 四〇(八八)頁

【広島】 「大会報告」、「日本英文学会第廿一回大会」

※「昨年十月十五日（土）、十六日（日）の両日、京都同志社大
学栄光館において開催された」大会では「チョーサーにおける選
択・選考の構文について（広島高師教授榊井迪夫氏）」と「*Republica*
の作者は Nicholas Udall か（広島文理大教授木方庸助氏）」が発表し
ている。

116 同右 四〇一（八八―九）頁

【長崎】 「大会報告」、「日本英文学会第二回九州大会」

※「特に Edmund Blunden 氏を迎えて、十月八（土）、九（日）の
両日、九州大学文学部第一番第二番教室において開催された」大
会では、「Hardy の *The Dynasts* に展開せられたる宇宙と人生」（長
崎女専教授小松茂平氏）が発表している。

117 同右 四二―三（九〇―一）頁

【ヒロシマ】 「片々録」、N.R.T.「昭和二十四年度日本英学界」

※「翻訳は、司令部許可のものを加えて、にぎやかであった」と
あり、「石川欣一・谷本清ハERSHEY「ヒロシマ」、杉本喬ハERSHEY
「アダノの鐘」への言及がある。

118 同右 四四（九二）頁

【広島】 「片々録」、「広島島の英語弁論大会」

「広島高師英語学会主催の第二回中国・四国高校英語弁論大会は
十月二十二日（土）、二十三日（日）の二日間、文化評論社後援
の下に付属小学校講堂に於て開催。英濠軍より Maj. J. M. Smail

等審判官として臨席し、中国、四国各地より男女生徒合わせて25

名以上の選手の参加をみて盛大に举行された。『The Most
Important Time and the Most Important Thing』という題で発表した
広島女学院佐々木翠嬢が第一位の優勝トロフィを獲得した。因に
昨年度の優勝校は広島市修道高校であった。（榊井迪夫氏投）」

119 同右 四十七（九五）頁

【広島】 広告「ウィリアム・ブレイク 「無心と経験の歌」研

究 広島大教授 小川二郎著」

※出版元は京都市の中央図書出版社。

120 三月一日 九六卷三号 二八三〇（二二四 六）頁

【atom bomb】 吉田安雄「P. O. D. の新版」

※P. O. D.（※*Pocket Oxford Dictionary*）は「1942年には第四版」
が出ているが「1946年に改訂され、1947年に修正再版された」。
この最新版におさめられた新語の中には「blitzkrieg, paratroops,
quising, D day, atom bomb のように今度の戦争の勃発以降に属す
る言葉が大多数を占めている」という。

121 同右 三四（一三〇）頁

【原子核力】 「普通和文英訳課題」

「(前略) (三) 二十世紀の自然科学の最も大きな事件は、いまさ
らいうまでもなく原子核力の解放であるといわなければならな
い。(渡辺慧)」

122 同右 四三―四(一三九―四〇)頁

【広島】 「片々録」、渡米留学生決る」

※広島からは二名の合格者が出ていると報じているが、記事に掲載された合格者リストからは「吉田弘重(広島高師)」の名前しか判別できない。

123 同右 四五(二四二)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「池田計三氏 広島大学助教授となる。」

124 四月一日 九六巻四号 三六(二八〇)頁

【Atomic engines】 「HOME AND FOREIGN NEWS: BRITISH PLAN ATOMIC ENGINES」

※記事本文省略。

125 同右 三六(二八〇)頁

【H-Bombs】 「HOME AND FOREIGN NEWS: H-BOMB PRODUCTION ORDERED BY TRUMAN TO INSURE SECURITY」

※記事本文省略。

126 同右 四六(一九〇)頁

【広島】 「片々録」、「大分県立竹田高等学校英語部」

「発足以来二カ年間で、英語劇「Salome」、「Hamlet」を演じて好評を博した同校 E. S. S. は昨年12月30日機関誌 Zephyr, No. 2 を発刊した。広島大学教授木方庸助博士の「孫たちに」(中略)等を収

めている。(後略)(Y. S.^(三)氏投)

127 同右 四七(一九二)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「加藤正男氏 広島市、向洋本町(略)に転居。」

128 五月一日 九六巻五号 二六一―八(二二八―二〇)頁

【原子核力】 小沢準作(担当)「普通和文英訳練習」

※121の答案と解説。

129 同右 三三(二二五)頁

【ヒロシマ】 「新刊書架」K.T.⁽⁸⁾「シンクレア・ルイス「血の宣言」(上巻) 滝口直太郎訳」

「(前略)ニール(※自分が「三十二分の一の黒人」であることを知った主人公)が「血の宣言」を行うことには非常な勇気のあることだった。と同時に、作者がこのような問題を正面から取り上げることにも余程の勇気が必要であつたろう。老ルイスはそれを敢行した。ルイスのこのような作家の態度は戦後アメリカ文学界の主要な方向として注目されてよいもので、例えば、「月沈みぬ」のスタインベック、「ヒロシマ」のハーシーなどの理想主義とルイスのこれを相照しあうものがあるようだ。(後略)」

130 同右 三六(二二八)頁

【Hiroshima】 「片々録」 「Hiroshima Jogyakuin English Teacher's Society Organized」

「The Jogakuin English Teachers' Society (JETS) was newly organized and held its inaugural meeting on Jan. 26th. It is composed of all the English teachers, both American and Japanese, 23 in all, of the whole institution, that is, the Junior and Senior High Schools and the College of the Hiroshima Jogakuin combined. At the meeting Miss Thomas, of the College, spoke on "How can we improve our teaching of English as a second language?" and Dr. Matsumoto, President of the Jogakuin, on some of the impressions he had got of those with whom he had come into contact while on his recent visit to America. (M. K. 投)」

131 六月一日 九六卷六号 一二二(二五四)頁

【Hiroshima】 F. H. R. 「米英消息」 「John Hersey の最近作」

「A Bell for Adano, Hiroshima の作者 John Hersey が最近第三作 *The Wall* (632pp. Knopf, \$4) を出した。これは独軍の Warsaw 侵入時、市の一角に囲まれたユダヤ人たちの苦難を描いたものであるが(中略)これは Hersey の失敗作だと見る人もある。(中略) *A Bell for Adano* にしろ、*Hiroshima* にしろ、事実を小説的に扱うことによつてすばらしい成功を収めたのであるが、それは、扱われた事実が人人の眼前の問題であつたり、もつとも関心をひかれていた問題であつたりした場合にこそ得られた成功で、今では前二作とも大分光彩を失つたのである。そこに、この第三作であるが、この小説に扱われている事実がすでに古い。(中略)作者の限界をここにやや明らかにしたものでないかというのである。」

132 七月一日 九六卷七号 三六(三〇八)頁

【広島】 「片々録」 「大阪女子大学英米文学研究会発会」

※ 「大阪女子大学では、同学卒業生を中心として、一般女性のため英米文学研究会を開く」ことになったが、五月七日の「発会記念講演会」には「広島大学教授、大阪女子大講師山本忠雄氏の「シエイクスピアとディケンズ」という講演も含まれていた。」

133 同右 三七(三〇九)頁

【広島】 「片々録」 「個人消息」

「東田千秋氏 広島県安佐郡祇園町(略)へ転居」

134 八月一日 九六卷八号 二九(三四二)頁

【原爆】 「普通和文英訳課題」

「(前略) (三) 原爆は生きのこつた人々の精神から、永遠といふ観念を拭ひ去る。これは人類が今日まで孜孜として築いた文化を亡ぼすばかりでなく、万一生きのこつた人間をも変へて、全くの動物にしてしまふ。(芹沢光治良)」

135 同右 三三(三四五)頁

【広島】 喜安雄太郎 「鶴沼通信」

※ 喜安が自分の郷里である松山の伊予郡岡田村に戻ると「甥や姪は二十余人も集まつてくれた。広島に学ぶ者も、吹田に勤めてる者も帰つて来てくれた」という。

136 同右 三七(三四九)頁

【長崎】 「片々録」 「個人消息」

「松尾勝氏 長崎市の活水女子大学教授、学部長となり、英文学を担当。」

137 同右 三八(三五〇)頁

【水素爆弾】 「新聞雑誌英学一覽」、「雑」

※「*Current of the World* (六月号)」に「水素爆弾の原理をめぐって」(福田邦三)という記事がある。

138 九月一日 九六卷九号 一九(三七二)頁

【原子兵器】 矢島太一「世界の中の日本 対日講話問題(3) 国防省の見解」

「(前略)米国外交評論界の最高権威 Walter Lippmann 氏の見解は、ともかくきわめて自明であると思われる。」原子兵器の時代において、日本における基地の要求は、海軍基地用の港湾や飛行場用の一部の土地の借受けという形式による、旧式の租借権によつて充足することは出来ない。(中略)日本のような国を、原子時代における軍事的資産たらしめるためには、その全領土、全国民、および政府に対する最高の管理権を持つことが必要だ。」(後略)

139 同右 二五—六(三七七—八)頁

【原子爆弾】 菅原清治「戦中戦後の英国読書界傾向」

※戦後のサマセット・モーム、オルダス・ハクスリー、イブリン・ウオー等の作品が「物質文明は原子爆弾を発明するまでに進歩しているのに、精神文明はそれに伴わない」ことの悲劇を演じてい

ると述べている。また、「原子爆弾、毒ガス、細菌など、近代科学の所産である大量的な殺戮に役立つあらゆる武器を駆使して行われる第三次世界大戦を、更にその後来る神に対して悪魔が勝利を得るに至るといふ妖しくも残忍極まる世界」を描いた Aldous Huxley の *Ape and Essence* について触れている。

140 同右 三八(三九〇)頁

【広島】 「各大学英文科卒業論文題目」、「広島文理大」

※ Feste and Dogberry: Study of Shakespearean Humour (阿部万亀男) 'The Real in *Tess of the D'Urbervilles* (島津昭) 'On Mark Twain's *The Adventure of Huckleberry Finn* (関卓雄) 'Nature in Wordsworth's Poems (水島潔) 'On Wordsworth (堂山浩) 'Thomas Hardy: A Study of His Two Tragedies (塚野耕) 'A Study of Charles Dickens, Chiefly on the Character in His Earlier Works (瀬戸勝美) 'A Study of the Nigger of the "Narcissus" (鈴木朗) 'A Study of David's Character (奥田俊作) 'A Study of *Paradise Lost* (大井上滋) 'The World of Dickens (乾勇) 'A Study of the Character-Drawing in *David Copperfield* (伊藤忠世) 'A Study of *Hamlet* (以倉隆) 'On Keats's Poems (横山彰) 'Washington Irving Seen through the *Sketch Book* (下村登)

141 一〇月一日 九六卷一〇号 二七—八(四一九—二〇)頁

【原子爆弾】 小沢準作(担当)「普通和文英訳練習」

※134の解答と解説。

142 十一月一日 九六卷一一号 二二(四五四)頁

【atomic bombs】 「HOME AND FOREIGN NEWS: AMERICAN VETS APPROVE USE OF ATOMIC BOMBS」

※記事本文省略。

143 同右 三五(四六七)頁

【広島】 「片々録」、日本英文学会中国四国大会」

「日本英文学会第三回中国四国大会は、十一月十一日(土、午後一時より)と、十二日(日、午前九時より)の両日、広島市東千田町広島大学(広島文理科大学)において開催される予定である。(後略)」

144 同右 三五(四六七)頁

【広島】 「片々録」、第三回渡米留学生選抜要項」

「総司令部の好意による第三回渡米留学生の許可が九月五日文部省から発表された。(中略)(五) 申込及び試験場 文部省大学学術局庶務課、北海道、東北、名古屋、京都、広島、九州、金沢の各大学。」

145 同右 三七(四六九)頁

【広島】 「片々録」、個人消息」

「福原麟太郎氏 七月卅日より八月八日まで郷里広島県へ帰省した。」

146 同右 三七(四六九)頁

【広島】 「各大学(旧制)英文科講義題目」、「広島文理大」

※ Chaucer: *Canterbury Tales* 演習、Henry Medwall: *Fulgens and Luces* 演習、英国演劇史講義、文学概論、Sheridan: *The School for Scandal* 演習、以上木方庸助担当、各週二時間。Milton: *Paradise Lost* 演習、Arnold: *Essays in Criticism* 講読、英語学序論、言語学講義、以上山本忠雄担当、各週二時間。Shakespeare: *Othello* 演習、Blunden: *One Hundred Poems* 講読、英文学史講義、以上小川二郎担当、各週二時間。Keats: *Endymion* 講読、Lamb: *Essays of Elia* 講読、Dickens: *The Old Curiosity Shop* 講読、以上福田民男担当、各週二時間。

147 一月一日 九六卷一、二号 一九(四九二)頁

【原子爆弾】 矢島太一「世界の中の日本」、「対ソ予防戦争論予防戦争論議」

※予防戦争論に対しては、「原子爆弾でロシアをノックアウト出来るという仮定は見当違いである」云々という強い反対意見があるという。

一九五一年

148 一月一日 九七卷一、二号 三八(三三八)頁

【原子力 水素爆弾】 「高等和文英訳課題」

「原子力といふものが、人間の知恵や技術や操作によつて現実的にその偉力を示され、また近頃では水素爆弾の性能がいろいろに伝へられるのを聞いたたり読んだりしてゐるうちに、地球といふものが、私にはどうかとすると掌の上に乗るほどの小ささを感じら

れるときがあるのだつた。／＼これまでのものは、爆撃と云つたところで、地図の上でのその一弾の被害は針の先で突いたほどのものであつたのに、水素爆弾では一寸したマークがつけられる。しかも、その装填の仕方によつては殆どいくらでもと云つてよいほど影響力を大きくすることが出来るといふのだから、その汚点をつなぎ合わせて地球の表面を覆ふとすれば……といふ考え方も、それほど唐突なことではなかつた。(由起しげ子)

149 同右 四三(四三)頁

【広島】 「片々録」、日本英文学会中国四国大会」

「日本英文学会第三回中国四国大会は、十一月十一日(土)、十二日(日)の両日、広島大学広島文理科大学で行われた。来会者は二百数十名あり、諸氏による研究発表のほか、G. S. Fraser 氏、木方庸助氏 (St. George 劇と獅子舞)、矢野峰人氏 (外国文学研究の態度) などの特別講演があり(中略) (※二日目の) 午後六時から、広島高師英語科学生による英語劇 'Justice' が、皆実分校講堂において公開された。」

150 二月一日 九七巻二号 四二(九〇)頁

【広島】 S. K. 「鶴沼通信」

「(前略) 今年へ入つて広島大学の小川二郎氏の「ウイリアム・ブレイクの無心と経験の歌研究」が京都の中央図書出版会社から出た。菊判三百頁(値三百五十円)。立派な装丁の書物である。／＼広島から出る季刊誌 *English* 第二号に小川氏の書いた O. Henry の *The Gift of the Magi* の研究を読んで私は大いに啓発されてか

ら小川氏の書くものを特に注意して読むことになり、この新著ブレイク研究は貪るように一気に読んだ。(後略)」

151 同右 四四(九二)頁

【広島】 「片々録」、京大英文学会講演会」

※「京大英文学会では、去る十一月廿三日(木) 午後一時より、同文学部第七教室に於て、終戦後第一回の講演会を開催した」が、その一つとして「マーヴェルの『ガーデン』に就て」(広島大、御与員三氏) という講演があつた。

152 同右 四五(九三)頁

【広島】 「片々録」、個人消息」

「佐伯好郎博士、ドイツ文学の登張竹風氏とともに、文化功勞により広島市から表彰された。」

153 同右 四六(九四)頁

【広島】 「新聞雑誌英学一覧」、「評論及び講話」

※『(広島女子短大) 研究紀要(第一集)』に大原三八雄「書簡体文学について」という論文が掲載されているのが分かる。

154 三月一日 九七巻三号 二八一—九(二二四—五)頁

【原子爆弾】 矢島太一「共産主義陣營の戦力(世界の中の日本)」

※ソ連の現有兵器には二〇—五個の原子爆弾が含まれているという記述がある。

155 同右 三二—四 (二八—三〇) 頁

【原子力 水素爆弾 atomic energy H-Bomb】

伊地知純正(担当)「高等和文英訳練習」

※148の答案と解説。

156 同右 四三—四 (一三九—四〇) 頁

【広島】 「片々録」、N.R.「昭和二十五年度日本英文学界」

「(前略) 日本英文学会の大会は東京の青山学院大学で開かれ、支部大会は九州、広島、仙台などでもよおされた。(中略) 新博士として慶応の厨川文夫、広島大学の小川二郎両氏がある。(後略)」

157 同右 四四—五 (一四〇—一) 頁

【広島】 「片々録」、佐伯博士「景教」を自費出版」

「現在広島県佐伯郡廿日市町という小さな海岸町の町長をとめている同博士は既に八十歳の高齢、景教(ネストリアン教)研究では世界的な大学者、終戦直後、長年心血を注いで研究した景教の貴重な成果を英文で総合出版することを思い立つたが、この種の論文出版を心よく引受けてくれる出版社がないので同博士は出版資金をつくるため一生かゝって集めた蔵書三千六百冊(洋書五百冊、漢籍三千百冊の完全な景教研究文献)を手放すことに決心、東京都下三鷹市に建設中の国際キリスト教大学に六十五万円で譲ることになり、それによつて論文集(英文)は間もなく出版されることになっている。(後略)(東京新聞十二月卅日報)」

158 同右 四五(一四一) 頁

【広島】 「片々録」、個人消息」

「福原麟太郎氏 一月六日より十一日まで広島県へ帰省した。」

159 同右 四七(一四三) 頁

【広島】 広告「研究社 講座 全24巻書目」

※第二回発売は第10巻『ディッケンズの英語』(広島大学教授山本忠雄著)が発売中であることが分かる。⁽⁹⁾

160 四月一日 九七巻四号 四四—五(二八—九) 頁

【Hiroshima】 「片々録」、「News from Hiroshima Jogakuin」

「JETS (Jogakuin English Teachers' Society) met last September [sic] to hear Prof. Kuwada talk on "How They Study Shakespeare in an American College." English Speaking Society presented the court scene of *The Merchant of Venice* as part of the Culture Festival programme. The same society published the first edition of the monthly college newspaper, *The Torch*, in English, under the students' own editorship and management. Newly organized English Literary Society of the college students held its inaugural meeting on 13th of November, centenary of R. L. Stevenson, with Mr. Kato giving a talk on the style, and Misses Ashiwa and Kemyama on life and works, of the author. The society held its meeting for December in the hall of the CHE Library here, Prof. Inaishi talking on Hardy and Misses Abe and Fujishima on his works. (M.K.) (※加藤正男)」

161 五月一日 九七巻五号 五十七(一九七一九)頁

【atomic bomb 原爆】 加納秀夫「ハーバート・リードの「平和教育論(上)」

「(前略)彼にとつて、現在の戦争が人類を annihilate する苛烈さをもつものであることはむろんであるが、atomic bomb を使用する次の戦争が原爆するところには既に国土の抹殺(obliteration)しかない。しかも近接する大陸基地からの原爆目標となる島国においては、この危険は大きい。「この新兵器がもつとも効果を持つのは、イギリスや日本のように、比較的まとまつた小さい国である。」したがつて戦争はいかなる意味においても考えられないのである。(後略)」

162 同右 二四(二二六)頁

【a-bomb】 「HOME AND FOREIGN NEWS: EISENHOWER VIEW AIRD DURING TALK ON USE OF A-BOMB」

※記事本文省略。

163 同右 三〇—一(二二二—三)頁

【原子爆弾 水素爆弾 広島 長崎】 矢島太一「民主主義米国の戦力(世界の中の日本)」

※アメリカの戦力について、原子爆弾は三五〇—七五〇個ある、そして「最近生産の原子爆弾は、広島、長崎で使つたものゝの120倍の偉力があるといわれているが、水素爆弾はまだ大規模実験の域を脱していないと見るべきであろう」という記述がある。

164 同右 三三(二二五)頁

【放射能】 F. H. R. 「米英消息」 「Arthur Koestler の新作」

「わが国でも翻訳がでた *Darkness at Noon* の作者 Arthur Koestler が *The Age of Longing* (362 pp. Macmillan. \$3. 50) という新しい小説を書いた。所は Paris で、時は 1950 年代の半ば。西欧と“Commonwealth of Freedomloving People”(ソ連)との戦争は今や旦夕に迫っている。携帯用ガイガー測数管(Geiger-counter)や放射能除けの傘が町のどの店にも売っている。(後略)」

165 同右 四三(二三五)頁

【放射線】 「片々録」、R. F. 「英学時評」

「鈴木文史朗氏がなくなつた。(中略)最近は東京新聞の放射線の筆者の一人であつたそうだが、どこまでもチャーナリストたることを楽しみた、又、新聞によつて世間に呼びかけることの重要性を信じていられたに相違ない。(後略)」

166 同右 四五(二三七)頁

【広島】 「片々録」、H. H. Collins 氏逝々」

「もと広島高師、広島文理大英語講師で、現ハワイ大学教授 H. H. Collins 氏は、二月二十二日突然逝去した、享年六十二歳。氏は在日二十五年、英語教育に於ける功により、勲四等を受けられていた。(中略)(小川二郎氏報)」

167 同右 四五—一六(二三七—八)頁

【広島】 「各大学英文科卒業生論文題目」、「広島文理大」

※ A Study of Matthew Arnold and his Criticism (井内彰) ' A Study on R. W. Emerson's Earlier Life (糸藤洋) ' On George Eliot's Thought Seen in her earlier works; Chiefly in *The Mill on the Floss* (河毛準) ' Pater's Humanism in *Marius the Epicurean* (川田光子) ' A Study of G. B. Shaw's View of Life: Chiefly in *Man and Superman* (北村隆司) ' A Study on D. H. Lawrence (児島格¹⁾) ' Panta Rei - A Study of Shelley's Poems - (佐々木淳子) ' A Study of William Saroyan and his Plays (定地豊) ' A Stylistic Study of *David Copperfield* (陳崎克博) ' Some thoughts on Whitman's life and character (田丸成三) ' On W. Morris' Socialism (中内正夫) ' Byron and his Later Poetry (永井治) ' Thomas Hardy Seen Through *Tess of the D'Urbervilles* (原田正雄) ' Some Aspects of Dickens' English (広谷寛) ' On Thackeray's View of Life (吉岡光雄) ' An Approach to Keats's Poetry (輪延誠司)

168 六月一日 九七巻六号 三三三(二七三)頁

【原子爆弾】 矢島太一「西欧民主主義の戦力(世界の中の日本)」※「元フランス首相レイノー氏」が、ヨーロッパ人は「原子爆弾の大量貯蔵によつて支持される60コの師団を」持つことで東側に対抗できると述べていることを伝えている。

169 同右 四五(二八五)頁

【コロッセ】 「片々録」、「コロッセ」の国内販売

「John Hersey: *Hiroshima* の原書 (B6 - 118 頁、本クローズ表紙上製本) が、東京千代田区富士見町法政大学出版局を通じて、特別に日本国内へ販売されている。これは、No more Hiroshimas 運動に

奇与し、世界の平和に貢献したいという原発行所 Knopf 社の篤志によるもので、値段も原定価\$1.75 のものを特に二百円で、採算を度外視して提供されている。教科書などに使用のための一括注文には、更に特別考慮が払われる由である。」

170 同右 四五(二八五)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「木方庸助氏 広島文理大を辞し、神戸市外国語大学専任教授となる。住所(略)。なお広島文理大には講師として出講」、「山本忠雄博士 広島文理科大学を辞し、関西大学教授となる。」

171 七月一日 九七巻七号 四四(三三三)頁

【広島】 「片々録」、「小川二郎氏文博となる」

「広島文理大教授小川二郎氏は『ウイリアム・ブレイク』「無心と経験の歌」研究」の論文を以て文学博士の学位を授けられた。(中略) 博士は明治三十六年大阪市に生まれ、大阪市岡中学を経て、大正十一年、広島高師文科二部(英語科)に入学、同十五年卒業と同時に和歌山県海草中学に奉職、次いで広島高師付属中学へ転じ、昭和六年広島文理科大学英文科入学、同九年卒業、以後同大学の助手、助教授を経て、現在は同学英文科主任教授。」

172 同右 四五(三三三)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「原民喜氏 作家(三田文学同人) 慶大英文科卒、三月十三日自殺」、「榎田迪夫氏 広島文理科大学助教授となる」、「小川二郎

氏 広島文理科大学英文科主任教授となる。「山本忠雄氏 住所(略)。六月号に「広島文理科大学を辞し、関西大学教授となる。」とあるは誤りにつき「広島文理大教授、関西大学は講師。」と謹んで訂正致します」。

173 同右 四六(三三四)頁

[Hydrogen bomb] 「新聞雑誌英学一覽」、「英文」

※「Current of the World (五月号)」に“World Conscience and The Hydrogen Bomb” [by G. Stephens Spinks] という記事が掲載されている。

174 八月一日 九七巻八号 三四(三七〇)頁

[Atomic age] 広告「時事英語研究 八月」

※「Bertrand Russel の BBC 演説三篇: —Living in an Atomic Age: Present Perplexities: Obsolete Ideas」とある。

175 同右 四三(三七九)頁

【(広島)】 「片々録」, 「日本英文学会第二十三回大会」

「今期は六月二日、三日。開催地は豊中市の北郊にある大阪大学文学部。(後略)」

※この大会では、「「チョーサーにおけるイデオムの形成」(広島文理大助教授**榊井迪夫氏**) Chaucer Idiom の研究法として、その milieu に入つて intensive に考究する方法と、歴史的な Syntactical な方法と挙げその分類例説」という発表があった。

176 同右 四五(三八一)頁

【広島 Hiroshima ヒロシマ】 「片々録」, 「ヒロシマ」教科書に」

「John Hensy: Hiroshima がわが国で販売されることについては本欄でも既に報じたが、今学期から広島大学など八大学で教科書になった。五月廿三日の朝日新聞はこれについて教授者側の意見を次のごとく伝えている。「中大の野崎孝教授は採用の理由を『生きた現代アメリカ語を教え、これにより平和を見つめたい気持ちから』といふ、不採用の教育大の福原麟太郎教授は『この講義は約一年かゝり、空襲で人が殺されるのを毎時間教えるのは辛いという教授の意見が多かつた』と語つた。」」

177 同右 四五(三八一)頁

【広島】 「片々録」, 「個人消息」

「福原麟太郎氏 六月上旬、郷里広島県へ帰省」、「加藤正男氏 広島女学院大学を辞し、青山学院大学教授。(略)へ転居。」

178 九月一日 九七巻九号 二二—三(四〇六七)頁

[H-bomb Hiroshima] 乾亮「ACD に ついて」

「戦後わが国に輸入されて最も好評を博している英語辞典に ACD (※ The American College Dictionary, Random House) がある。(中略) H-bomb, pinpoint (v, adj.), Regent style などが見いだされたいのは selection によるためであろうか。(中略) 固有名詞には日本に關係したものが非常に多い (e.g. Dai Nippon, Attu, Hiroshima, &c.; Murasaki no [sic] shikibu, Hirohito, Yamashita (Tomoyuki) (“The Tiger of

Malaya”), Tojo (Hideki), &c.)。(後略)]

179 同右 四四―五(四二八―九) 頁

【広島】 「片々録」、「学園消息」

「(前略) 広島県英語教員連盟は六月九日、広島大学において総会をひらき、役員改選の結果、名誉会長に小川二郎氏、会長に飯野至誠氏、役員に川島要、榊井迪夫、松本鐘一、越智英二の諸氏を選ばれた。またカールスン博士と植木松太郎氏の講演と中野丈策氏による研究授業があつた。(後略)]

180 同右 四五(四二九) 頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「廣瀬はま子氏 広島女学院院长に八月就任の予定」、「池田計三氏 兼ねて広島大学広島女子高等師範学校教授に補せらる」、「古賀頼夫氏 広島大学広島高等師範学校附属高等学校教諭に補せらる」、「松木卓夫氏 新約聖書口語体改訳事業を主宰するため広島女学院院长を辞任し、(略) に転居した」、「長田新氏 広島大学教授に補せらる」、「櫻井役氏 広島大学長事務代理を免せらる」。広島大学広島文理科大学長事務代理を免せらる」、「佐藤正夫氏 広島大学助教授に補せらる」、「田辺昌美氏 広島大学広島高師教授となる」。

181 一〇月一日 九七卷一〇号 二二(四五四) 頁

[atomic weapons] 「HOME AND FOREIGN NEWS. BRITAIN BUILDING ATOMIC WEAPONS」

※記事本文省略。

182 同右 四三(四七五) 頁

【広島】 「片々録」、R. F. 「英学時評」

※佐伯伯郎の *The Nestorian Documents and Relics in China* (学位取得論文) の第二版が出版されたこと、その意義について述べている。

183 同右 四四―五(四七六―七) 頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「石堂豊氏 広島大学助教授を兼任」、「榊井迪夫氏 広島大学広島高師教授を兼任」。

184 同右 四五(四七七) 頁

【広島】 「各大学(旧制)英文科講義題目」、「広島文理科大」

※ Shakespeare: *Macbeth* (演習)、言語学概論、以上山本忠雄担当、各講義週二時間。Blunden: *A Hundred English Poems* (演習)、Whitman: *Leaves of Grass* (講読)、文学概論、以上小川二郎担当、各講義週二時間。Chaucer: *Canterbury Tales* (Prologue) (演習)、Dryden: *All For Love* (講読)、以上榊井迪夫担当、各講義週二時間。Shakespeare: *A Midsummer-Night's Dream* (演習)、英国劇史講義、以上木方庸助担当、各講義週二時間。Pater: *Imaginary Portraits*、以上福田民男担当、週二時間。

185 同右 四六(四七八) 頁

【Atomic Age】 「新聞雑誌英学一覽」 「翻訳及び訳注」

※「時事英語研究(八月号)」の「Living in an Atomic Age」 [Bertrand Russell]が掲載されているのが分かる。

186 十一月一日 九七巻一―号 四三(五二三)頁

【広島】 「片々録」、日本英文学会中国四国大会」

「第四回大会を十月二十日(土)、二十一日(日)の両日、広島大学広島文理科大学(広島市東千田町)において開催の予定。(後略) [日本英文学会広告]」

187 同右 四五(五二五)頁

【広島】 「各大学英文科卒業生論文題目」、「広島文理大」

※人名の違い(167の「北村隆司」がここでは「地村隆司」である)を除けば、167と全く同じ内容である。

188 二月一日 九七巻一―号 四四―五(五七二―三)頁

【広島 長崎】 「片々録」、「個人消息」

「越智英二氏 本年三月十一日、田中トシエ嬢(広島女学院大学勤務)と目出度く結婚。新郎は広島大学広島文理大助手。住所は(略)」、「陳崎克博氏 広島高師附属高校・中学教諭に新任」、「武居正太郎氏 長崎大学学芸学部に新任」。

一九五二年

189 一月一日 九八巻一―号 二六(二六)頁

【atom bombs】 「SPEECHES AND STATEMENTS. GIST OF THE

PAMPHLET ENTITLED "ONE WAY ONLY" BY ANEURIN BEVAN OF BRITISH LABOUR PARTY, LONDON 1951.」

※文中に、「おそろくマッカーシズムやローゼンバーグ事件を念頭においた」次の文章がある。「A wild anti-Communist crusade, to be conducted by every means from which hunts to atom bombs, is preached by the extreme elements on the American Right.」

190 同右 二七(二七)頁

【広島】 Y. F. 「英学関係諸雑誌展覧」

「今日わが国で出版されている英語・英文学関係の雑誌の数はかなりある。敗戦直後、一時、「英文学」、「英米文学研究」、*English* というような、大雑誌の風格を持った諸雑誌がつきつぎとつづぶ声をあげた頃にくらべると、表面的ないし市場的華々しさはないが、その反面、多くの研究がじみな各種の学術雑誌に発表されている。上記三誌のうち、広島から出ていた *English* が比較的最近まで続いていたのだが、近頃消息を絶つたように見えるのは惜しまれる。他の二誌は、多分、いずれも創刊号だけで後続かなかつた。(後略)」

191 同右 三一(三一)頁

【原子爆弾】 矢島太一「米国戦略上の新動向(世界の中の日本)」

※朝鮮戦争の経験からアメリカの戦略思想が変わってきたこと、その典型例として原子爆弾と原子戦略爆撃のことを詳細に論じている。

192 同右 四三(四三)頁

【広島】 「片々録」、「日本英文学会第四回中国四国大会」

「十月廿日廿一日の両日、広島大学広島文理大で開催された。(後略)」

※発表には以下のものがあつた。「The Novel in Contemporary American Literature」(広島女学院副院長Miss Katherine Johnson)、「クリスティナ・ロウゼツテイの詩の本質(広島女子短大大原八三雄)」、「詩人の倫理—Kearsの場合(広島文理大研究科輪延誠司氏)」、「Phonemics(広島高師吉田弘重氏)」。なお、運営・司会には小川二郎や「広島大学の田辺清市、辻茂雄、雑賀忠義、飯野至誠の諸教授及び広島女学院大学教授湯浅初男氏、徳島大学教授浅地昇氏が当たつた」とある。

193 同右 四四(四四)頁

【広島】 「片々録」、「カリンズ先生記念事業会」

※急逝した元広島文理大・高師の講師 Collins の遺骨が京都に埋葬されること、それにあわせて卒業生有志が偲ぶ会を開くという記事。

194 同右 四四(四四)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「石坂一雄氏(広島文理大卒) 佐賀大学助手に就任。」

195 二月一日 九八巻二号 三九(八七)頁

【原子戦】 「高等科和文英訳課題」

「年を新たにするに際して、今日ほど、人間が真に人間的であることを強いられている秋はないと痛切に思う。それは、世界の殆どすべての者が平和を熱望し、祈願しているにもかかわらず、いぜんとして、原子戦の危機と恐怖が客観的に存在しているからである。だから、今日の平和は真の平和ではない。擬制平和である。新しい原子戦の準備がこの平和の期間になされる。世界をおおう今日の絶望的な、虚無的な不安はこうした現実から胚胎し、拡大してきている。(改造) 新年号)」

196 同右 四四(九二)頁

【広島】 「片々録」、「木方教授退官記念の集い」

「広島文理科大学英文科教室では昭和廿六年春同大学を退官した木方庸助博士の功績をたゞえ謝恩の念を表するため去る十一月十八日(日)、講演会および謝恩茶話を催した。講演会は午後一時より文理大二号教室でひらかれ、小川二郎教授の挨拶あつて後、梶井迪夫氏の「詩人チヨースーの心」と木方博士の「一人の道」があつた。(中略) 木方博士は明治廿二年三月廿一日岐阜市に生れ、同四十年岐阜中学卒業、同四十五年広島高師英語科卒業、大正二年同校同部研究科修了、同五年京大英文科卒業、同八年京大大学院修了、同九年松山高校教授となる、同十二年海外留学、昭和十一年文学博士の称号をうく、同十七年広島文理大教授、同廿六年三月退官、現在は神戸市外国語大学教授である。」

197 四月一日 九八巻四号 三六一七(二八〇—二)頁

【原子戦 atomic warfare】 増田綱(担当)「高等科和文英訳練習」

※195の答案と解説。

198 同右 四四(一八八)頁

【広島】 「片々録」、「カリンズ氏追悼会」

※(前略) 去る二月廿四日京都市烏丸三條の平安教会で故人の追悼会が取行われた。当日は多数の参会者があり、故人をしのんで広島高師校長桜井役氏らが追悼の辞をのべ、広島文理大・講師の教え子を代表して、小川二郎博士が謝恩の言葉を霊前に捧げた。

199 五月一日 九八巻五号 四四(二三六)頁

【長崎】 「片々録」、「古賀十二郎氏長崎名誉市民に」

「昨年十一月三日西日本新聞の文化賞をうけた老英学者古賀十二郎氏が長崎名誉市民に推された。氏は本年七十二歳、東京外語の出身で現在は長崎市の郷土史家として知られている。戦災に遭っているのは長崎県大村市に不自由な仮寓生活のうちに研究をつづけているので、長崎市では古賀氏顕彰会を結成する運動を起す一方、氏を長崎博物館名誉館長に招き未発刊のオランダ語原典の「出島日記」の翻訳を完成して貰う筈だと伝えられている。(春雨生⁵⁰報)」

200 六月一日 九八巻六号 四四(二八四)頁

【広島】 「片々録」、「第三回アメリカ研究講座」

「ロックフェラー財団の後援による「アメリカ研究講座」は今夏で三回となるが、今年の計画が次のように発表された。講座は六月三十日から八月十五日まで、アメリカ側教授陣のうち文学関係としてはハーヴァード大学のミラー博士が加わっている。日本側は東大ほか各大学の教授が加わる。会場となる東大では近く、全国各大学に聴講者募集をよびかけるが、今年はとくに、若い世代の学究を対象とし、三学年以上の学生にもはじめて聴講資格が与えられる。なお八月十三日から十五日までは広島市で特別講座がひらかれる予定。」

201 同右 四五(二八五)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「和田三郎氏 広島県教育主事より愛媛大学へ転任」、「山本忠雄博士 三月末を以て広島文理科大学を退官、四月より大阪女子大学教授に就任。関西大学及び大阪大学文学部にも引き続き出講。五月上旬より大阪外国語大学で特別講義をする筈。」

202 七月一日 九八巻七号 四五(三三三)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「東田千秋氏 広島大学文学部を辞し、大阪女子大学教授となった」、「辻茂雄氏 広島大学皆実分校教授を退職、学習院大学教授に就任。住所(略)。」

203 八月一日 九八巻八号 一(三三七)頁

【広島】 「沙翁劇場「運命座」の模型」

「五月中旬、広島において広島大学を中心に催された SHAKESPEARE 祭(「片々録」英学時評を参照)に出陳された Fortune Theatre の模型である。大きさは実物の 1/25 縮尺で、美事に出来ている。かゝる模型が試作されたのは、日本では始めてのことであつて、その努力に対して敬意を表する。設計は森本国夫氏、制作は安田利八氏。(後略)」

※表紙(二頁)に写真が掲載されている。

204 同右 二二三(三三八—九)頁

【広島 原子爆弾】土居光知「ふるさと」

〔(前略)村(※土井の郷里である高知県十市村)の小学校へ行ってみると、細川氏の記念碑が新しく建てられていた。細川氏は広島大学数学教授で、世界的に有名な学者であつたが、原子爆弾の犠牲者になつた。碑には氏が幼少のときから実行してきた座右銘が刻まれている。「不断の努力は天才を凌ぐ、毎日三時間の勉強」。(後略)〕

205 同右 三二一(三六八)頁

【atomic weapons】「HOME AND FOREIGN NEWS: U.S. SCIENTISTS PERFECT NEW ELECTRONIC BRAIN」

※ロス・アラモス研究所の科学者たちが電子計算機「Maniac」を製作したが、その性能は以下の通りである。「But some of the problems which it would be required to solve in atomic weapons development work at Los Alamos laboratory were so complex that the Maniac was expected to take 20 hours or more to work out a single

answer.”

206 同右 四四(三八〇)頁

【広島】R.F.「片々録」、「英学時評」

「広島大学の英文科が中心になつてシェイクスピア祭をするということは、去年の秋からきいていた。それが、いよいよ五月の中旬に行われることになり、招かれてそれに出席することが出来たのは幸運であつた。広島大学の好誼を深く謝する。広島全体がシェイクスピアのお祭をしているような工合であつた。広島女学院大学も広島女子短期大学もその企画に加わつて、みんなでお祭をやつてゆこうという心持ちが現れているのは気持ちがよくつた。(後略)」

※このあと、佐伯好郎には面会かなわず、広島の行事終了後に福山市で後援を依頼されていたが、同日に文芸春秋三十周年記念講演会で中野好夫(他)が話をしていたという記述が続く。

207 同右 四四—五(三八〇—一)頁

【広島】「片々録」、「広島シェイクスピア祭」

「広島大学英文学会、広島女学院大学英文科、広島県、市教育委員会の主催で「シェイクスピア祭」が五月十七・十八日の両日開催された。行事は、講演会、資料展示会、記念演劇、映画鑑賞会など多方面にわたつた。講演会は学術講演(五月十七日)と一般講演(五月十八日)があつて、前者ではレッドマン氏の「Short Speech」、福原麟太郎氏の「政治文学としての英文学」があり、後者では福原教授の「外来文化の問題」があつた。資料展示会は広島大学図

書館ホールを会場とするシエクスピア研究資料展示と、広島アメリカ文化センターを会場として英国風物資料展示及び文化映画が行われた。記念演劇は英語劇「リア王」が五月十七・十八の両日に三回公演された。広島文理大、広島大、女学院の学生が出演した。映画鑑賞会では五月十三日福屋名画劇場で「マクベス」と「バレリーナ」が上映された。」

208 同右 四六(三八二)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「吉田弘重氏 広島大学文学部助教となつた。」

209 一〇月一日 九八卷一〇号 三二(四六四)頁

【原子爆弾 ヒロシマ】 N. R. T. 「現代詩と思想」

※ Kimon Friar, "Politics and Some Poets" (New Republic, July 7, 1952) の紹介。記事中に、「ただ Friar は、現代の過渡期は小さなもので、一つの文化が動揺するが、やがて、また、立ちなおるといふようなものでなく、大爆発ともいふものだと考えている。(中略) この場合、キリスト教自身も、必ずしも救いとなるものではないというのが Friar の考えである。キリスト京の摂理の到来を告げるハトはヒロシマに最初の原子爆弾を落とした金属のハトによつて、空から追い払われた」といふ一節がある。

210 同右 四二(四七四)頁

【原子爆弾】 S. K. 「鶴沼通信」

※福原麟太郎と山岸徳平が編纂した『ローマ字で引く国語新辞典』

(研究社)は「原子爆弾」を含めた「新語に重きを置く」といふ記述がある。

211 同右 四四(四七六)頁

【広島】 「片々録」、「日本英文学会中国四国大会」

「第五回大会を来る十月廿五(土)廿六(日)の両日、徳島大学芸学部(徳島市南常三島町)にて開催の予定。研究発表希望者は発表題目及び内容梗概(原稿用紙一枚程度)を広島文理科大学英文学研究室宛九月三十日迄に必着するように申し込まれたい。【広告】」

212 同右 四五(四七七)頁

【広島 原爆症】 「片々録」、「学園消息 広島文理大英文学研究室」

「広島罹災の際原爆症のため逝去した故竹中利一氏の七回忌を迎え八月二十六日、市内堀川町永照寺にて慰霊祭を行った。」

213 同右 四六(四七八)頁

【広島】 「片々録」、「個人消息」

「田辺昌英氏 広島大学文学部講師となつた。」

214 十一月一日 九八卷一一号 二二(五〇三)頁

【atomic bomb】 「SPEECHES AND STATEMENTS. FORMER U. S. PRESIDENT HERBERT HOOVER'S SPEECH TO THE REPUBLICAN NATIONAL CONVENTION, CHICAGO, JULY 8,

1952]

※おそろくローゼンバーグ事件を念頭においた、以下の文言がある
“American and British traitors have given them [the Communists] the atomic bomb.”

215 同右 三〇(五一〇)頁

【原子戦争】 大島文一「STEVENSON 民主党大統領候補(世界の中の日本)」

「(前略)ス氏が最近友人に語つたと伝えられる、つぎの言葉は十分味わうべきである。「今から何年かの後、米国がソ連と対決する日がきつとやつて来るに違いない。私が大統領になつた場合、その時につぎの二つの中の一つを選ばねばなるまい。一つはソ連と交渉すること、私はきつと対ソ援和的だと非難されるであろう。も一つは断乎たる決意を固めることである、そうしたら私は世界を原子戦争に引っぱりこむものだと非難されるであろう。」」

216 同右 四二(五二二)頁

【広島】 喜安雅太郎「鶴沼通信」

※水死した大阪大学教養部の教授、住田庄次郎が広島県出身であることに触れている。

217 同右 四四(五二四)頁

【広島】 「片々録」、R.F.「お願ひ」

「私事に亘ることで誠に恐縮であります、私の *Conrad: Typhoon & The Nigger of the Narcissus* 英文学叢書註中の海語の訂正をして

下さつた、もと大阪土佐堀アンドリュウス商会機械部にいられた塩野谷米吉氏、および広島商船学校教諭でいられた高橋得之助氏の御消息をうかがいたく存じます。このたび三十年ぶりで、Conrad改訂版を出すはこびになりましたので、その御礼を申し上げたく思うのであります。」

218 同右 四五(五二五)頁

【広島】 「片々録」、「住田庄次郎氏逝く」

※「八月十一日夜、夫人と共に自宅前の万代池で舟遊中不慮の事故のため急逝した」大阪大学教授の住田が「広島講師付属中」出身であることに触れている。

219 同右 四六(五二六)頁

【Atomic】 「新聞雑誌英学一覽」、「英文」

※「あるびよん(九月号)」に「Living in the Atomic Age [Tetsuro Furukaki]」という記事が掲載されてゐる。

220 一二月一日 九八卷一二号 二二一—五二(五五〇—七九)頁

【広島】 「英語英文学研究業績一覽」

※「ENGLISH STUDIES IN JAPAN, 1951-1952」には以下の業績が掲載されている。「54. 政治文学としての英文学、福原麟太郎(シェイクスピア記念祭講演、広島大学主催 27. 5.)」、「69. 「Chaucerの統語法の性格」榊井迪夫(「広島大学文学部紀要」)」、「237. 「クリスチーナ・ロウゼッティの世界——社会観と女性観——大原三八雄(広島女史短期大学「紀要」2巻)」、「512. 「Satanの創造」福

田民男（広島大学「文学部紀要」）。また、「INDEX OF RESEARCHERS」には以下の氏名が掲載されている。福田民男（広島文理大）、大原三八雄（広島女子短大）、榊井迪夫（広島文理大）、吉田弘重（広島文理大）。

221 同右 八六（六一四）頁

【長崎】 「片々録」、「スターキー女史へ叙勲」

「生涯の大半を日本の女子教育と伝導と社会事業につくし四十二年の日本生活を終つて帰米するミス・ベルザ・フロレンス・スターキー女子に対して勲四等瑞宝章が贈られた。女史は明治四十四年廿九歳で来日、長崎活水女学校大学部その他に教えた。戦時中はカリフォルニアの日本人収容所で日本人に奉仕したが、戦後再び来日、北九州の各学校の講師をつとめた外、引揚戦災者困窮者の救済援助には私財を投じてつくした。本年七十一歳。（松井康秀氏報）」

222 同右 八七（六一五）頁

【広島】 「片々録」、「宮森麻太郎氏逝く」

「日本文学の英訳として海外にも知られている宮森麻太郎氏は去る十月二日東京品川の自宅で死去した。享年八三歳。氏は明治二年広島に生まれ、明治学院の前進築地一致英和学校に入学したが、慶応義塾の英語専門別科に転じた。（後略）」

注

1 齋藤一『帝国日本の英文学』人文書院、二〇〇六年。

2 一八九八年四月に創刊（ジャパン・タイムズ社）、一九〇一年一

月より英語青年社、一九四四年五月より研究社が発行所となり現在に至る。二〇〇九年四月よりウェブ版となった。英語英米文学界の代表的雑誌の一つ。詳細については「年表・英語青年一〇〇年の歩み」を参照せよ（http://www.keukyusha.co.jp/uploads/03_webinfo/sei-nen.html [二〇一二年一月四日閲覧]）。研究社より復刻版（一九七九

年）が出版されており、各地の大学図書館等でバックナンバーを比較的容易に閲覧することができるが、復刻版の電子化はされていない。なお、この雑誌の「官報」的性格については、一九四八年に富原芳彰が次のように述べている。「今日の本誌を評して「英学界の官報」だと言う人があるという噂を聞いた（中略）本誌がすでに個人的恣意を超えた客観的存在となつている」（九五巻四号四四（一四〇）頁）。

3 この号の実際の発行日は「9月下旬」（二六（二二〇）頁）である。

4 『英語青年』の「編集後記」。編集者（福原や成田）の「英学時評」をはじめ、さまざまなイベント・人事情報などが掲載されており、二〇世紀における日本の英米文学語学界の実態を知るためには非常に便利である。

5 英文学者の成田成寿。なお、イニシャルやペンネームについては、英語青年復刻版刊行会『英語青年復刻版 総索引』（研究社出版、一九九九年）を参照した。以下同様である。

6 不詳。

7 Y.F.（あるいはF.H.R.）は英文学者の富原芳彰。

8 一九〇四年から一九四四年まで『英語青年』の編集や発行等に関

- わつていた喜安瓏太郎。明治末期以降の英学史に非常に詳しく、一九四五―五二年の期間、ほぼ毎号長文のエッセイを執筆している。
- 9 英文学者の福原麟太郎。一九三二年より事実上『英語青年』の編集を行っていた。
- 10 「片々録 本誌の月号」には「本号は二月一日発行の予定のところ止み難き事情による印刷遅延のため三月一日発行となつた」(三一―九五)頁とある。一九四七年は発行月日と号数がずれている。
- 11 注7を参照。
- 12 一九四七年頃から「普通和文英訳練習」や「高等科和文英訳練習」に継続して投稿し、「読者クラブ」にも寄稿した人物であること以外は不詳。ただ、この投稿者が明らかに A-bomb を意識したペンネームを使い続けたことは非常に興味深い。
- 13 第九四卷九号三二(二八八)頁、同卷一〇号三二(三五二)頁、九六卷九号四〇(三九二)頁に同様の広告がある。
- 14 第九四卷一二号三二(三八四)頁に同様の広告あり。
- 15 おそらく田辺昌美であろう(180を参照)。

- 16 記事中に名前がある大塚保男であろう。
- 17 不詳。
- 18 アメリカ文学者の高村勝治。
- 19 同様の広告は九七卷四号四八(一九二)頁、同卷五号四八(二四〇)頁、同卷八号四八(三八四)頁、九八卷六号四八(二八八)頁、同卷一〇号四八(四八〇)頁にもある。
- 20 不詳。

※ 本稿は、第三九回原爆文学研究会(二〇一二年七月七日)における筆者(齋藤)の口頭発表「原爆死没者慰霊碑文の英訳について―グローバルゼーション下の想像力」において配布した資料を元にしている。また、本稿は、筆者が研究分担者として関わっている、科学研究費補助金(基盤研究(B)、課題番号 24220055)「ポスト太平洋戦争の「英米文学」研究―トランスパシフィックな文学的想像力と政治学」(平成二四―二七年度、研究代表者は越智博美(一橋大学))の成果の一部である。